

# 紀 要

## 第 11 号

### 目 次

序

- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (瀬 口 眞 司)  
—地域の検討1. 湖東北部地域—
- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (小 島 孝 修)  
—地域の検討2. 湖東南部地域—
- 櫛の造形 —縄文時代の竖櫛—…………… (中 川 正 人)
- 滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描…………… (田井中 洋 介)
- 今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例…………… (横 田 洋 三)
- 古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域…………… (細 川 修 平)
- 長浜市石田町所在の石棺について…………… (北 原 治)
- 観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例…………… (辻川哲朗・山中 繁)  
—蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査—
- 蒲生郡の渡来氏族とその文化…………… (大 橋 信 彌)
- 草津市笠山古窯出土遺物の紹介 (続) …………… (畑 中 英 二)  
—窯詰めの方法の復元について—
- 森瓦窯再考 —「田原道をめぐる二つの地域」補遺—…………… (重 岡 卓)
- 近江式装飾文よりみた小形板碑の年代…………… (兼 康 保 明)

1 9 9 8 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

# 古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域

細川修平

はじめに

琵琶湖博物館の展示の中で特に興味深いテーマとして、琵琶湖とガリラヤ湖の比較展示が存在する。琵琶と琴、楽器に喩えられる形態に始まり、豊かな自然の恵み、信仰の発生、文化ルートとして重要な位置に存在する点など、驚くほどの類似点が存在し、比較研究の面白さとともに重要性を私たちに知らせてくれる。

ところで、筆者もガリラヤ湖周辺の遺跡を幾つか見学する機会を得、その類似点や相違点を体験的に考えることができた。もとよりパレスチナ考古学に不案内の筆者にとって、ガリラヤ湖の遺跡は不思議さと感動を与えてくれたが、それらを琵琶湖との比較研究の組上とすることは不可能である。ただ、ガリラヤ湖の遺跡を見学して漠然と感じた点が存在する。「小さい」という印象である。ガリラヤ湖は琵琶湖のほぼ南湖程度の大きさであり、確かに「小さい」湖ではある。この「小さい」というイメージがやたらと気にかかったのである。

琵琶湖が「大きい」という自慢ではない。ガリラヤ湖の「小さい」というイメージは、そこが「競合・共生する場」として歴史の単位になり得るかという問題意識である。現在でのガリラヤ湖畔の都市はタイベリアスが唯一であり、「競合・共生の場」として機能は果たしていないように感じられた。これが、キリストが暮らしていた頃、あるいはバビロニアが巨大化した頃のガリラヤ湖にも当てはまるのか、大きな不安として襲ってきたのである。残念ながら、この不安を確認するだけの知識は今の筆者には存在しない。

さて、一定の面積を持つ水域世界が競合と共生の場としての「歴史単位」と認識すべき点は、まさに「地中海」によって実証され<sup>(1)</sup>、青海（日本海）や黄海においても試みられている。おそらく、「湖」も同様の視点で認識すべきであると漠然と考えていた。疑う余地も無かったのである。それゆえに、ガリラ

ヤ湖の「小さい」というイメージは、筆者にとって、まさに青天の霹靂であった。湖は違うのか。現在の筆者の力量で手の届く「古墳時代の琵琶湖」で、もう一度考え直すこととしてみた。

## 1. 琵琶湖地域における前方後円墳の分析

現在、琵琶湖地域においては不確実なものを含めておよそ105基の前方後円墳が確認されている。これらのうち、何らかの形で発掘調査が実施され、一定水準の内容が判明しているものは、30基に満たない。従って、前方後円墳を考える時には、その大半が現地踏査で得られる情報以外、全く資料が存在しないものとなる。しかし、前方後円墳に関しては、基本的な墳形の変化が後付けされており、現地踏査によっても、大雑把な年代観などを得ることが可能である。そうした点から、現地踏査など主観的な部分によるものではあるが、琵琶湖地域の前方後円墳に関して前期・中期・後期の大雑把な年代観を付与し、それぞれの段階の前方後円墳の在り方について考える。

### a) 個別古墳における年代の決定について

各古墳の年代観については一覧表に譲るものとして、年代を決定した根拠について説明する。まず、発掘調査などが実施されているもの、あるいは埴輪などが採集され一定以上の情報が蓄積されているもの、内部主体が横穴式石室である事実が確認あるいは推定されるものについては、それぞれの情報によって年代を決定する。これによって、確実な前方後円墳の約半数の年代が決定できる。

この作業によって年代が決定されたものについての傾向をみれば、後円部指数が75を越える所謂「帆立貝形古墳」は、中期か後期にはほぼ限定できる点が読み取れる。従ってこうした一群を取り上げ、これらの内、後円部墳頂に平坦面が形成されているものを中期、形成されてないものを後期と区別する。この細分は、内部主体の推定を根拠としている。



番号	名称	所在	立地	墳形	墳長	後円径	後円高	前方幅	前方高	比高	埴輪	墓石	後円指数	前方指数	比高指数	年代観	その他・備考
1	安土瓢箪山	安土町	尾根先端	方円	134.0	78.0	13.0	62.0	7.0	6.5	Ⅱ	有	58.21	79.49	4.85	前期	集成Ⅲ期
2	若宮山	湖北町	尾根頂部	方円	49.0	32.0	5.2	18.0	2.8	2.4	Ⅱ	有	65.31	56.25	4.90	前期	
3	飯たべ山	湖北町	丘陵頂	方円	31.0	19.0	3.5	10.0	1.2	1.5	無	無	61.29	52.63	4.84	前期	
4	安養寺大塚越	栗東町	平野	方円	75.0								0.00		0.00	前期	集成Ⅳ期・墳形規模に諸説あり。
5	灰塚山1号	栗東町	丘陵	方方	58.0	41.0	5.0	19.0	2.0	3.2			70.69	46.34	5.52	前期	
6	出庭亀塚古墳	栗東町	平野	方円	44.0	36.0							81.82	0.00	0.00	前期	墳形・規模に諸説あり。
7	定納古墳	近江町	尾根頂部	方円	35.0	20.0	4.0	12.0	2.0	2.0			57.14	60.00	5.71	前期	
8	古保利A1号墳	高月町	丘陵頂	方円	35.0	22.0	2.3	16.0	1.5	1.5			62.86	72.73	4.29	前期	深谷古墳
9	古保利A2号墳	高月町	丘陵頂	方円	78.0	51.5	6.0	34.0	1.5	1.8			66.03	66.02	2.24	前期	西野山古墳
10	古保利B6号墳	高月町	丘陵頂	方方	60.0	34.0	6.5	22.0	3.0	3.0			56.67	64.71	5.00	前期	小松古墳
11	古保利C18号墳	高月町	丘陵頂	方方	39.0	22.0	2.3	11.0	0.8	0.8			56.41	50.00	1.92	前期	大浦古墳・墳形に疑問有り。
12	古保利D1号墳	高月町	丘陵頂	方円	52.5	37.0	5.0	23.0	3.0	2.0		有	70.48	62.16	3.81	前期	寺ヶ浦古墳
13	古保利D2号墳	高月町	丘陵頂	方方	28.0	14.0	0.8	6.0	0.3	0.3			50.00	42.86	1.07	前期	臼ヶ谷古墳・墳形に疑問有り。
14	古保利D41号墳	高月町	丘陵頂	方方	29.0	17.5	1.8	12.0	1.0	1.5			60.34	68.57	5.17	前期	北谷古墳
15	古保利D42号墳	高月町	丘陵頂	方円	32.5	21.0	2.5	8.0	1.3	0.5			64.62	38.10	1.54	前期	黒見古墳
16	古保利E14号墳	高月町	丘陵頂	方方	27.0	16.5	2.3	11.0	1.0	0.6			61.11	66.67	2.22	前期	屋ヶ谷古墳・墳形にやや疑問有り。
17	古保利E15号墳	高月町	丘陵頂	方円	40.0	26.0	5.6	15.5	1.8	1.5			65.00	59.62	3.75	前期	大谷古墳
18	古保利E1号墳	高月町	丘陵頂	方方	16.5	10.5	0.5	9.0	0.6	0.8			63.64	85.71	4.55	前期	上大谷古墳・墳形に疑問有り。
19	古保利E5号墳	高月町	丘陵頂	方方	25.0	14.0	1.5	9.0	0.8	0.7			56.00	64.29	2.80	前期	岩屋古墳
20	古保利E7号墳	高月町	丘陵頂	方方	15.0	11.0	1.8	6.5	0.5	1.5			73.33	59.09	10.00	前期	蟬谷古墳・墳形に疑問有り。
21	古保利E9号墳	高月町	丘陵頂	方方	27.0	17.0	2.0	12.0	1.3	1.5			62.96	70.59	5.56	前期	熊野山古墳・墳形にやや疑問有り。
22	大森古墳	高月町	尾根先端	方方	62.0	38.5		25.0					62.10	64.94	0.00	前期	
23	馬上山古墳	高月町	尾根頂	方方	38.0	23.0		15.0					60.53	65.22	0.00	前期	
24	王子古墳	山東町	尾根上	方円	45.0								0.00		0.00	前期	墳形に疑問有り。
25	和迹大塚山	志賀町	丘陵頂	方円	72.0	50.0	8.0	30.0	5.0	4.0		有	69.44	60.00	5.56	前期	集成Ⅲ期
26	不ヶ谷1号	志賀町	丘陵	方円	65.0	36.0	4.5	24.0	4.3	1.3			55.38	66.67	1.92	前期	
27	熊野本6号墳	新旭町	丘陵頂	方方	27.0	15.9	3.0	14.4	1.4	1.0			58.89	90.57	3.70	前期	
28	皇子山1号墳	大津市	丘陵頂	方方	60.0	35.0	6.0	28.0	4.0	2.0			58.33	80.00	3.33	前期	
29	春日山E1号墳	大津市	丘陵頂	方円	60.0	32.0	6.0	20.0	3.5	2.3			53.33	62.50	3.83	前期	
30	膳所茶臼山	大津市	丘陵先端	方円	120.0	60.0	8.0	40.0	5.0	5.0	Ⅱ	有	50.00	66.67	4.17	前期	
31	春日山E12号	大津市	丘陵	方円	53.6	28.4	3.0	14.8	0.7	2.0			52.99	52.11	3.73	前期	
32	山ヶ鼻	長浜市	尾根上	方円	41.0	22.0	1.5	12.0	1.5	2.0			53.66	54.55	4.88	前期	
33	龍ヶ鼻	長浜市	丘陵頂部	方円	44.0	24.0	1.5	12.0	1.5	2.0			54.55	50.00	4.55	前期	
34	雪野山	八日市市	丘陵頂	方円	70.0	40.0	4.5					有	57.14	0.00	0.00	前期	集成Ⅲ期
35	供養塚	近江八幡市	平野	方円	53.0	39.0	2.0	25.0			Ⅳ	有	73.58	64.10	0.00	中期	
36	岩原1号墳	湖北町	尾根頂部	方円	35.0	18.0	3.0	14.0	2.0	0.8	無	無	51.43	77.78	2.29	中期	
37	丁野岡山古墳	湖北町	尾根上	方円	31.0	15.0	2.5	14.0	1.0	2.5	無	無	48.39	93.33	8.06	中期	
38	川田1号墳	守山市	平野	方円	18.0	13.0		9.8			Ⅴ		72.22	75.38	0.00	中期	
39	下戸山	栗東町	尾根先端	帆立	60.0	45.0							75.00	0.00	0.00	中期	

表1-1 琵琶湖地域の前方後円墳等一覧



40	栗東狐塚3号	栗東町	平野	帆立	32.0	25.0						V		78.13	0.00	0.00	中期	
41	地山	栗東町	平野	帆立	89.0	67.0	6.2	33.0				III	有	75.28	49.25	0.00	中期	
42	榑山	栗東町	平野	帆立	99.0	75.0	7.5	43.0	3.0	6.0		IV	有	75.76	57.33	6.06	中期	
43	安土茶臼山	安土町	尾根上	方円	30.0	10.0	4.5		3.0	1.5		IV		33.33	0.00	5.00	中期	
44	後別当古墳	近江町	尾根先端	帆立	60.0	50.0								83.33	0.00	0.00	中期	
45	高溝狐塚3号墳	近江町	平地	方円	30.4	24.4		9.0				V		80.26	36.89	0.00	中期	
46	北山古墳	虎姫町	尾根頂	方円	40.0									0.00		0.00	中期	
47	古保利B1号墳	高月町	丘陵頂	帆立	21.0	15.0	2.5	11.0	1.0	2.5				71.43	73.33	11.90	中期	
48	古保利F1号墳	高月町	丘陵頂	方円	32.5	23.5	2.3	11.0	0.8	0.8				72.31	46.81	2.31	中期	
49	姫塚	高月町	平地	方円	70.0	46.0	6.0	12.0	1.5	3.8				65.71	26.09	5.36	中期	
50	父塚古墳	高月町	平野	方円	70.0	40.0								57.14	0.00	0.00	中期	
51	北馬上古墳	高月町	尾根頂	方円	35.0	25.0	4.0	13.0	3.0					71.43	52.00	0.00	中期	
52	湧出山1号墳	高月町	丘陵頂	方円	35.0	23.0	5.0	28.0	5.0	0.5				65.71	121.74	1.43	中期	
53	拝戸3-10号墳	高島町	山麓	帆立	25.0	20.0	7.0	8.0	1.4	2.0				80.00	40.00	8.00	中期	
54	烏脇A号墳	山東町	尾根頂部	方円	29.0	14.0	3.0	10.0	1.0	1.0				48.28	71.43	3.45	中期	
55	村居田	山東町	平地	方円	92.0							IV		0.00		0.00	中期	
56	道風神社1号墳	志賀町	尾根頂部	方円	34.0	17.0	2.9	11.5	1.0	2.2				50.00	67.65	6.47	中期	
57	泉西かん子塚	水口町	丘陵先端	帆立	60.0	50.0	5.2	20.0	2.5	3.5		III	有	83.33	40.00	5.83	中期	
58	泉塚之越	水口町	平野	方円	66.0	40.0		35.0				IV	有	60.61	87.50	0.00	中期	
59	宮の森	石部町	丘陵	方円	80.0	48.0	5.0	30.0				III	有	60.00	62.50	0.00	中期	
60	乗鞍古墳	浅井町	尾根頂部	方円	52.0	27.0	2.5	18.0	1.5	1.0		無	無	51.92	66.67	1.92	中期	
61	八島亀塚	浅井町	平野	方円	33.0	19.6	6.0	5.0	1.0	5.0		V?	無	59.39	25.51	15.15	中期	
62	南笠1号	草津市	平野	方円	27.5	18.5	3.5	16.0	1.8	1.8		V		67.27	86.49	6.36	中期	
63	南笠2号	草津市	平野	方円	30.0	21.0	4.0	15.5	2.3	1.8		V		70.00	73.81	5.83	中期	
64	兜稻荷	大津市	丘陵頂	方円	91.5	44.5	4.9	45.0	3.6	2.0				48.63	101.12	2.19	中期	
65	高峯1号墳	大津市	尾根頂	方円	43.0	23.0	7.0	16.0	5.0	1.0				53.49	69.57	2.33	中期	
66	西羅1号墳	大津市	尾根上	帆立	50.0	37.0	5.0	14.0	2.0	6.0			有	74.00	37.84	12.00	中期	
67	木の岡3号墳	大津市	尾根上	方円	40.0	21.0	2.5	10.0	1.5	1.0				52.50	47.62	2.50	中期	
68	木の岡茶臼山	大津市	尾根頂部	方円	84.0	49.0	6.0	23.5	3.6	2.4			有	58.33	47.96	2.86	中期	
69	木の岡本塚	大津市	丘陵頂	帆立	73.0	55.0	10.0	38.0	1.5	6.0			有	75.34	69.09	8.22	中期	
70	越前塚	長浜市	平地	方円	50.0	35.0	2.2							70.00	0.00	0.00	中期	
71	垣籠	長浜市	平地	方円	55.0	27.0	3.5	28.0	5.0	-1.5		V?	有	49.09	103.70	-2.73	中期	
72	三宮古墳	長浜市	平地	方円	30.0									0.00		0.00	中期	
73	上籠塚	長浜市	平地	方円	30.0									0.00		0.00	中期	
74	長浜茶臼山	長浜市	尾根先端	方円	92.0	47.0	8.0	32.0	8.0	0.0		IV	有	51.09	68.09	0.00	中期	
75	神郷亀塚	能登川町	平野	方円	26.0	18.0	5.0	2.0	1.0	4.0				69.23	11.11	15.38	中期	
76	富波2号墳	野洲町	平野	帆立	19.8	15.0		8.5						75.76	56.67	0.00	中期	
77	野洲亀塚	野洲町	平野	帆立	35.0	28.0	5.0					V		80.00	0.00	0.00	中期	
78	野洲大塚山	野洲町	平野	帆立	72.0	56.0	7.0	54.0				IV		77.78	96.43	0.00	中期	
79	雨宮	竜王町	尾根先端	帆立	83.0	68.0	7.0	33.0	2.5	7.0		III	有	81.93	48.53	8.43	中期	
80	人塚山	近江町	尾根先端	方円	51.0	36.0	4.0	10.0	2.0	4.0				70.59	27.78	7.84	後期	墳形・規模に諸説あり。須恵器TK43
81	塚の越	近江町	平野	方円	40.0	18.0		21.0				V	有	45.00	116.67	0.00	後期	須恵器TK208~TK10

表1-2 琵琶湖地域の前方後円墳等一覧

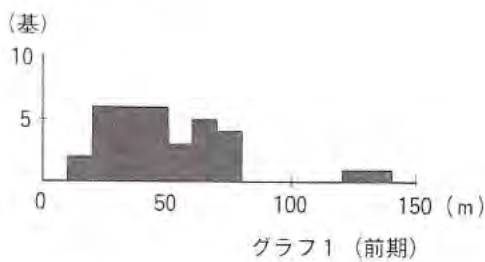


82	山津照神社	近江町	尾根頂部	方円	45.0	23.0	5.0	28.0	5.0	0.0	V	有	51.11	121.74	0.00	後期	須恵器TK10
83	小田刈	湖東町	平野	方円	29.0	15.0	2.5	5.0	1.5	0.5			51.72	33.33	1.72	後期	墳形には疑問有り。横穴式石室
84	横山神社古墳	高月町	平野	方円	32.0	20.0	2.5	15.0	1.8	0.5	有		62.50	75.00	1.56	後期	墳形は変形が著しい。横穴式石室
85	兵主神社古墳	高月町	平野	方円	32.0								0.00		0.00	後期	横山神社古墳と同程度と考えられる。
86	洞戸朱塚古墳	高月町	平野	方円	40.0	27.0							67.50	0.00	0.00	後期	須恵器TK10・規模は不確か。
87	鴨稻荷山	高島	平野	方円	45.0	24.0	5.0	24.0			V		53.33	100.00	0.00	後期	須恵器TK10
88	国分大塚	大津市	平野	方円	45.0	32.0		27.0					71.11	84.38	0.00	後期	横穴式石室
89	越前塚39号墳	長浜市	平地	方円	33.0	20.0		12.0					60.61	60.00	0.00	後期	須恵器TK43
90	赤塚古墳	長浜市	丘陵頂	帆立	30.0								0.00		0.00	後期	
91	西塚古墳	長浜市	丘陵頂	方円	29.0	20.0	2.0	6.0	2.0	2.0			68.97	30.00	6.90	後期	円墳の可能性有り
92	八幡社46号墳	八日市市	山麓	方円	21.0	11.0	3.5	9.0	2.0	1.5			52.38	81.82	7.14	後期	横穴式石室3基
93	石伏山	米原町	山裾	方円	36.6								0.00		0.00	後期	馬具・須恵器・船内向花文鏡など。
94	越前塚	野洲町	丘陵頂	方円	52.5	30.0	4.0	25.0	3.5	0.5			57.14	83.33	0.95	後期	横穴式石室
95	天王山	野洲町	丘陵頂	方円	49.0	27.0	8.0	29.0	6.5	-0.8			55.10	107.41	-1.53	後期	
96	野洲円山	野洲町	丘陵頂	帆立	37.0	28.0	7.8	15.0	1.5	6.0			75.68	53.57	16.22	後期	横穴式石室。須恵器TK10
97	穴蔵	野洲町	丘陵頂	方円	39.0	24.0	4.0	17.0	2.0	2.5			61.54	70.83	6.41	後期	横穴式石室。墳形に疑問有り
98	向山12号	野洲町	丘陵頂	帆立	23.0	17.0	2.5	8.0	2.0	2.0	V		73.91	47.06	8.70	後期	
99	岩屋	竜王町	丘陵	方円	40.0	23.0	4.0	20.0	4.0	0.0			57.50	86.96	0.00	後期	横穴式石室
100	岩原8号墳	湖北町	尾根上	方円	24.0	13.0	3.0	12.0	1.0	2.0	無	無	54.17	92.31	8.33	疑問	墳形には円墳とする説あり。
101	虎御前山古墳	湖北町	丘陵頂	方円	30.0								0.00		0.00	疑問	
102	桃山古墳	木ノ本町	尾根上	方円	30.0								0.00		0.00	疑問	墳形・規模に疑問有り。

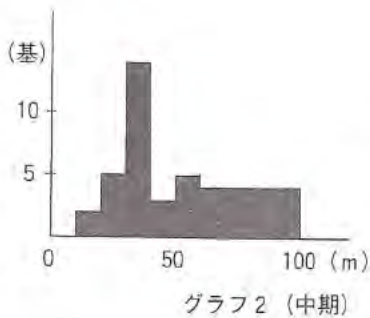
その他主要大型古墳

名称	所在	立地	径	高	埴輪	葺石	年代観
壺笠山古墳	大津市	丘陵	48		有		前期
北谷11号墳	草津市	丘陵	33		有		前期
泉東カンス塚	水口町	丘陵	42				中期
田中王塚古墳	安曇川町	平地	68	10	有	有	中期
ケンサイ塚古墳	蒲生町	平地	80	10	有		中期
雨乞山古墳	蒲生町	平地			有	有	中期
久保田山古墳	蒲生町	平地	63		有	有	中期
住連坊古墳	近江八幡市	平地	53				中期
五位塚古墳	高月町	平地	70				後期
平ヶ崎王塚古墳	今津町	平地	56				中期
岡の越古墳	浅井町	平地	63	8.2	有	有	中期

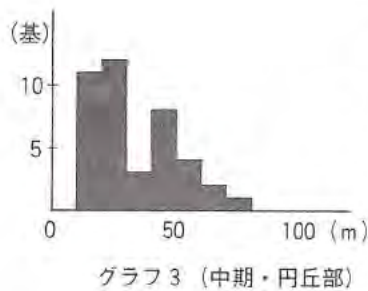
表1-3 琵琶湖地域の前方後円墳等一覧



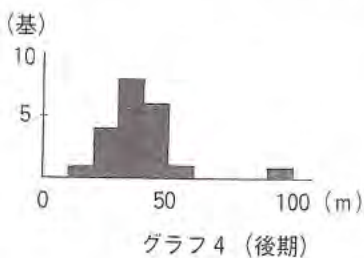
グラフ1 (前期)



グラフ2 (中期)



グラフ3 (中期・円丘部)



グラフ4 (後期)

第1図 時代別前方後円墳の規模分布グラフ

次に、前方部指数に注目すれば、前期から後期にかけて次第に大きくなる点を確認できる。おおよそ50~60のものが前期に、80以上のものが後期に該当する。しかし、個別にみれば古墳毎の偏差が大きく、古墳の遺存状態を的確に把握する必要が存在する。また、前方後円墳の場合は、明らかに前期である点を確認されている皇子山1号墳で80と言う数値を示しており、全体に大きくなる傾向が存在するかもしれない。従って、この数値に関しては、あくまで傾向として把握するに留めるが、一定の古墳に対して年代を与える根拠にはなるだろう。

さらに、前方部の発達を示す今一つの数値である比高指数をみれば、前期古墳で5前後、中期古墳で2前後、後期古墳で0前後以下となる傾向が読み取れる。しかし、これも個別古墳の偏差は大きく、その扱いは前方部指数の場合と同様とした。

さらに、群構成の中での在り方も考慮の対象とし

ておきたい。すなわち、古墳群としてのまとまりが指摘できる場合は、基本的には大きく年代が異なるものを含まないと考え、明らかに墳形などから矛盾が指摘できない限りは、その年代に近いものを想定する。

以上によって、おおよそ9割までの古墳の年代を決定することが可能となる。残り1割の中で凡そ半数は、筆者のみる限り前方後円墳と判断するには、なお慎重な議論や調査を必要と考えるもので、基本的には除外する。残りは現時点では保留とせざるを得ないものであるが、その大半が前期か中期の判断が困難であり、両者いずれに該当する可能性も考慮しつつ、群構成の一般性から中期に含んで扱う。

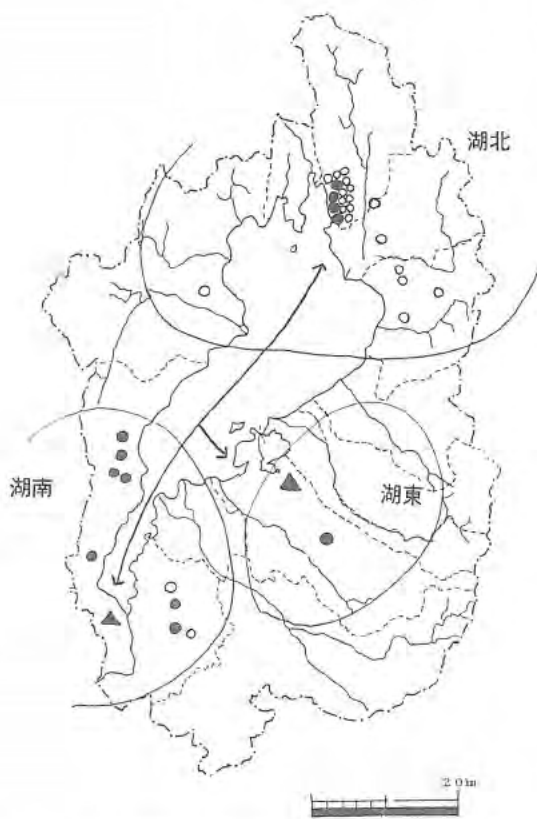
b) 前期の前方後円墳の造営方式  
前期の前方後円墳は、グラフ1からも明らかなように、墳丘規模によって三者に分類することが可能である。すなわち、30m級・60m級・120m級の三者である。

120m級の前方後円墳については、かつて論じたように、地域首長権と言う文脈の中で理解し得るものではなく、琵琶湖の水運と言う、言わばネットワークを媒介として成立したものである。この意味から「琵琶湖地域」の首長墓と言うことも適切であろう。

一方、30m級・60m級については、ほぼ地域単位毎に分布しており、それぞれの地域単位の首長権を表現したものと考えられる。以下、それぞれの地域毎の状況に対して分析を加える。

「湖北」と呼ばれる地域においては、古保利古墳群とその周辺に前方後円墳が集中する。さらに、この古保利古墳群付近を詳細に見れば、30m級前方後円墳の系譜と、60m級前方後円墳の系譜が同時的に造営されている可能性が指摘できる。すなわち、若宮山古墳・寺ヶ浦古墳・小松古墳・大森古墳・西野山古墳と言う60m級前方後円墳の系譜と、岩屋古墳





第2図 前期における前方後円墳の分布図  
 ・北谷古墳・黒見古墳・深谷古墳・大谷古墳などの30m級前方後円墳である。これらは階層的な関係を形成しているものと判断できるだろう。

さらに、「湖北」を「琵琶湖の北半分」と理解すれば、古保利古墳群の他に、馬上古墳、飯食山古墳、山ヶ鼻古墳、龍ヶ鼻古墳、定納古墳、熊野本6号墳などの前方後円墳が指摘でき、これらも基本的に30m級に含まれる。従って、その領域的な地域の決定は難しいが、古保利古墳群に集中的に墓域を求めた集団以外にも、60m級前方後円墳との間に階層的な関係を形成していた地域が、より広範囲に広がる可能性を想定させる。また、30m級前方後円墳をそれぞれ独立した系譜と理解した場合、古保利古墳群以外では1, 2基程度で構成され、前期と言う時間幅に対する系譜とするには疑問が存在する。墳形などから30m級の古墳相互が異なる年代観を示しているとも理解でき、基礎集団間の「持ち回り」的な系譜となる可能性も考えられるだろう。更なる年代観の根拠を得た後に結論付けるべき問題であり、ここでは「湖北」と言う地域単位が、従来考えられていた以上に広い範囲をカバーするもので、内部に階層

的な首長権の構造を持っていた可能性を指摘するに留めたい。なお、古保利古墳群に古墳が集中する理由については後述する。

「湖南」においては、灰塚山1号墳・皇子山1号墳・不ヶ谷1号墳・和辻大塚山古墳・春日山E-8号墳・春日山E-1号墳・安養寺大塚越古墳と言う60m級前方後円墳の系列が指摘できる。これらを単一の系譜と考えるか、『湖西』と『湖南』の2系譜と考えるかの問題も存在するが、ここでは、堅田地区と栗東地区に集中する傾向を指摘するに留める。

栗東地区については、伊勢遺跡や下長遺跡など、弥生時代から古墳時代にかけて琵琶湖地域で最も有力な遺跡が集中する区域であり、これにを背景に有力な古墳が造営されたと理解できる。一方、堅田地区は発掘調査の進展状況も関係するが、有力な集落は知られていない。従って、ここに前方後円墳が集中する特別な理由が必要となってくる。なお、「湖南」地域における階層的な下位に位置する古墳としては、織部山古墳や古富波山古墳、北谷11号古墳など、有力な内容を持つ中小規模の円墳群、あるいは出庭亀塚古墳などのように、40m級の「作り出し付き円墳」に求めるべきである。<sup>(5)</sup>これらは円丘部のみでの比較では60m級前方後円墳との差別化は不可能であり、副葬品も複数の三角縁神獣鏡を含むなど、60m級前方後円墳と何ら遜色がない。墳形のみによって階層性が表現されていると理解でき、前方後円墳相互の規模によって階層性を表現する「湖北」と対照的である。

「湖東」地区においては現時点では60m級の雪野山古墳が1基知られるのみで、これに関して詳細な分析を加えることは不可能である。ただし、雪野山古墳が雪野山山頂と言う「湖東」地域にとって象徴的な立地を占めている事実と、副葬品、特に武器類の大量埋葬から想定される被葬者の性格については<sup>(6)</sup>、十分考慮すべきものとする。また、地域内における階層的な関係については、八重谷古墳と言う存在を評価するならば、「湖南」地域と類似する状況を想定しておくことが無難かもしれない。

このように、琵琶湖地域の前期古墳を概観すれば、以下のような造墓の方式が復元できる。

古墳と言う「ある種の政治的な構築物」を営む基

礎的な単位では、「湖南」「湖東」では中小規模の（作り出し付き）円墳を、「湖北」では30m級の前方後円墳を造営する。その差異については、それぞれの地域の結合状況の差異を表現していると考えが、これ以上言及しない。こうした古墳を造営した単位は、分布状況からする限り、水系などを基本としていると考えることが可能であり、まさに「水＝水田」を媒介として形成された「首長層墓」と理解できる。ただし、個別の単位が歴代的にこうした「首長層墓」を造営した確証はなく、その造営のメカニズムの解明は今後の課題としておきたい。

このような基本的・基礎的な造墓活動に対する階層的な上位として60m級の前方後円墳が造営される。それぞれの領域的範囲を明示することはできないが、琵琶湖地域では「湖北」「湖南」「湖東」と言う3つ程度上位集団が形成されている可能性が考えられた。こうした上位集団は、個別の「首長層」では再生産不可能な物資や情報を巡るネットワークによって形成されたとする理解は否定しないが、琵琶湖地域の場合、さらに特殊な状況が加味されているようである。

すなわち、60m級の前方後円墳がまとまって分布する古保利古墳群の周辺地域と堅田地区のいずれもが、琵琶湖の水運を考えた時に、重要な地点を占めているという事実である。前者は琵琶湖から陸路を北へ向う接点であり、後者は琵琶湖水運の関所とも言うべき「琵琶湖の狭隘部」に面している。この事実関係について首肯することができるならば、「湖南」と「湖北」の結合性は琵琶湖と言う存在を媒介にして達成され、あるいは、結合の中で琵琶湖が大きなウエイトを占めていたと評価できるのである。「湖北」においては、さらに30m級や一般の古墳も多くがここに墓域を求めている。琵琶湖の水運への結合性の一層の強さが指摘できる。120m級の前方後円墳は琵琶湖と言う存在を前提として、そのネットワークの中で造営された。それ以下の前方後円墳の造営に関しても一定の影響を与えている。30m級・60m級・120m級とまさに段階的・階層的に琵琶湖をめぐる前方後円墳が造営され、全体として一つの機能性を発揮している。この段階の琵琶湖地域は、文字どおり「琵琶湖」の求心力によって地

域の結合が推進され、その求心性が表現されるような形で前方後円墳が造営されたのである。この意味から、琵琶湖地域としての機能を果たしていたということも可能であろう。なお、この段階の琵琶湖のネットワークは、「畿内から北陸南部」に到るルートの中でより重視されていたであろう点は、堅田地区と古保利地区に前方後円墳が集中する事実から窺える。東海や若狭との関係が重視される中期以降の状況とは大きな差異が指摘できる。

#### C) 中期の前方後円墳の造営方式

中期の前方後円墳は、グラフ2で見える限りでは、30m級に一つのピークが存在するものの、それ以上では50mから90m級まで、ほぼ均等に分布している。しかし、この段階に含めた古墳には、所謂「帆立貝形古墳」が一定以上を占めており、この墳形を何らかの規制された存在と考える立場から、より本来の位置を示すであろう後円部径での比較に置き換えてみる。この場合、グラフ3のように、30m級の円丘と50m級以上の円丘にグルーピングでき、50m以上でも一定のヒエラルギーを形成している。なお、同様の視点から、それぞれの規模を持つ円墳や方墳についても考察に加える必要があるだろう。

さて、30m級の円丘を持つ古墳については、ほぼ地域全体に分布し、かつ、一定の群構成を伴うことを一般としている点から、その大部分が所謂「古式小古墳群」の盟主墳として認識することが可能である<sup>(7)</sup>。すなわち、「古式小古墳群」の造営単位と考えられる「水系等による基礎的な単位」あるいは「さらに細分された単位」における首長層が、30m級円丘の古墳を造墓し、職能や政治的な地位によって、前方後円墳や帆立貝形古墳、あるいは埴輪を巡らせる円墳などの差異を表現したものと理解することが可能になる<sup>(8)</sup>。ただし、こうした古墳が造営単位毎に累世的に造営されているか、また、造営単位そのものが変化することは考えられないのか、など具体的な造営メカニズムについては不明な点も多く、今後に残された課題は多い。特に前方後円墳に注目すれば、いくつか結合することによって、一つの首長墓系譜を形成する可能性も考えられるが、個別古墳の詳細が明らかではない現時点では、結論は保留しておきたい。





第3図 中期における前方後円墳の分布図

一方、50m級円丘を持つ古墳では、いくつかのまとまりを持ちつつ、琵琶湖地域に点在しているものと理解できる。すなわち、湖西南部グループ、野洲川下流グループ、野洲川上流グループ、蒲生南部グループ、蒲生北部グループ、長浜グループ、浅井グループ、高月グループ、高島グループなどである。グループの決定にはなお議論も必要であるが、琵琶湖地域に幾つかグループが分立している状況は凡その理解が得られるだろう。

さて、グループと言う存在に注目すれば、「グループ内においては時間的連続関係を形成し、グループ相互には時間的並行関係を示す」という傾向を指摘することが可能であり、グループ間で系譜関係を維持している可能性も考えられるが、基本的には各グループが造営の単位として機能しているもの判断できる。また、そうしたグループ内において、50m級の古墳と30m級の古墳が、階層的な関係を形成している場合も想定できる。いずれにしろ、前期で見たような「地域単位」の大きなまとまりの中で前方後円墳が造営されるという体制を見出すことは不可能であり、これは、前方後円墳の規模の分布が比較

的均一であると言う特徴にも反映されている。こうした状況からすれば、前期で見たように「琵琶湖」と言う強い求心性を想定し、前方後円墳の造営によってそのネットワークを表出しようとした状況は、もはや見出すことは難しいかもしれない。

しかし、こうしたグループ単位の造営を認める立場にあっても、必ずしもグループ相互が等質な関係の中に位置づけられたものではなく、いくつかの傑出する地域を指摘することも可能であり、それらを手掛かりに当該期の造墓の在り方を探ることが可能になる。

一つは、栗太・野洲グループである。ここでは帆立貝形古墳と言う形態を採用しているものの、円丘部では最大級の地山古墳・椿山古墳を造営するとともに、新開2号墳など有力な内容を持つ円墳群を階層的下位に位置づけて造営している。前期段階においてもこの地域の有力性が指摘できたが、この傾向がこの段階になっても維持・強化されている。

今一つは、長浜グループである。ここでは、規模・墳形には諸説のある村居田古墳を100mクラスの前方後円墳と考えるならば、長浜茶臼山古墳とともに琵琶湖地域最大級の前方後円墳を連続して造営しており、最も遠くまで運ばれてきた竜山石製長持形石棺や、河内地域とのより直接的な技術交流を窺わせる一連の埴輪の存在など、琵琶湖周辺地域において重要視されていたグループであったと考えられる。

最後は、グループから除外した古墳の存在で、雨宮古墳、宮森古墳・兜稻荷古墳が該当する。いずれも単独的に存在し、かつ、中期においては最大級の古墳と認識できる。また、年代決定の根拠に欠ける兜稻荷古墳を除く、雨宮古墳と宮森古墳とは埴輪の存在から中期でも初期に位置づけることが可能であり、この段階に限定すれば、琵琶湖地域最大規模の古墳となる。系譜を形成していない点や忽然と地域の中に造営される点など、前期における安土瓢箪山古墳や膳所茶臼山古墳の在り方が変質したものと理解することも可能である。

さて、これらの古墳の立地を見れば、雨宮古墳は「湖東」から甲賀を経て伊賀に向う基点、宮森古墳は「湖南」から甲賀を経て伊賀に向う基点、兜稻荷

古墳は「湖南」から山城に向う基点に位置しており、交通ルートの基点に有力な古墳が営まれたと理解できる。長浜グループの優位性もこの文脈の中で評価することが可能である。すなわち、村居田古墳が裏坂田と呼ばれる領域に向けて立地している事実から、このグループの重要性は裏坂田から伊吹を経て関ヶ原・美濃地域へ向うルートの基点としての性格によるものと認識できる。

このように理解すれば、各グループが単位となって琵琶湖地域の古墳造営を担うと言う背景には、琵琶湖からその外部社会へ向うルートの重要性が強調され、それを背景にそうした地点に位置するグループが有力な古墳を造営すると言う動向が存在していると理解できそうである。言い換えるならば、前期段階では前方後円墳の造営で琵琶湖と言う存在への求心性が強調されていたのに対して、琵琶湖を基点として外へ向うルートが強調される状況が形成され、さらに個別のグループがその担い手として登場してくるという変化が読み取れるのである。外部社会へのルートと言う視点が琵琶湖への求心性を弱体化させ、代わって外部社会へのルートを担う地域・グループを中心に琵琶湖地域の各パーツが主体性と独自性を発揮させていると理解することも可能である。もちろん、湖西南部グループのように琵琶湖を強く意識した存在も指摘できるが、これらも琵琶湖地域のパーツとしてその水運に関与したものと言えるだろう。

ところで集落遺跡の動向から、5世紀後半頃には琵琶湖地域には物流の核となる地域が整備され、物流システムが整備される状況が指摘<sup>(9)</sup>できた。そのシステムの中核に栗太・野洲グループが位置し、このグループの古墳造営の優位性はまさにこの状況によって保証されたものと理解できる。しかし一方では、有力な古墳を造営する長浜グループは、物流システムの中では必ずしも高い評価が与えられておらず、システムの核に位置する高島グループでは、それに見合う古墳を造営していない。こうした事実関係を古墳造営と物流システムのアンバランスと理解・評価し、中期段階は物流システムが古墳の造営によって表現し得るものとして成立していなかった言うことも可能である。しかし、物流システムが琵琶

湖を基軸とした存在であるとともに、さらなる外部社会へ展開するものと考えれば、このアンバランスな現状は、全く異なった側面を示してくる。

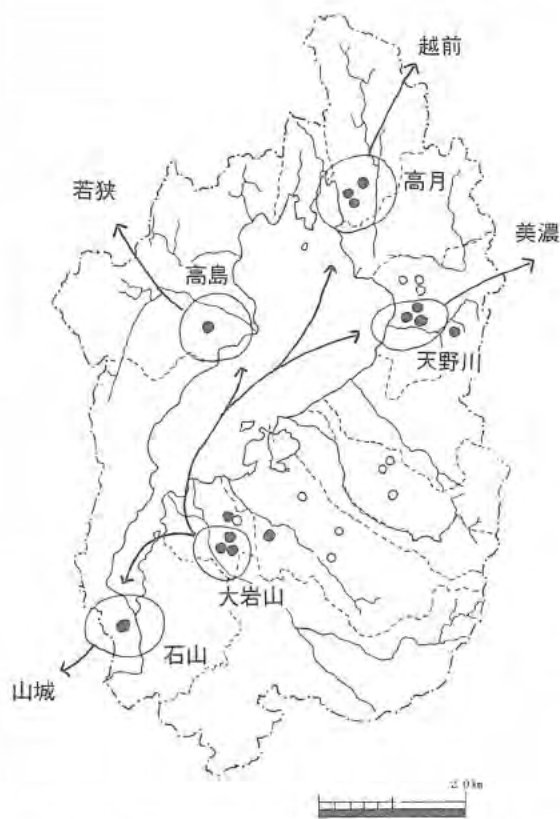
高島グループにおける物流の核としての性格は、「塩」の本格的生産を開始するとともに、この段階から有力な前方後円墳の系譜を形成する若狭地域との関係で理解することも不可能ではなさそうである。同じく、湖北・高月グループの物流の核としての性格は「加賀・越前沿岸地域」との関係で、長浜グループの古墳造営の優位性は「美濃・伊勢湾地域」の物流体系との関係で理解した時、現象が比較的スムーズに理解できる点も事実であろう。これらはより詳細な地域間の分析を持って結論付けねばならないが、この段階における琵琶湖地域の古墳の造営が外部社会へと向うルートが強調されている事実、言い換えれば、外部社会が琵琶湖と言う存在への指向性を表現している事実と符合している。少なくとも、琵琶湖地域と言う限定的な空間では理解すべきではない点を確認しておきたい。

いずれにしろ、中期とは、琵琶湖を媒介としたシステムが整備されるに従い、そこへの帰属性よりもそこからの発進性が強調された段階であり、それを前提として琵琶湖地域を構成するグループの古墳造営が活発化したと言えるのである。それとともに、前期段階では「畿内—琵琶湖—北陸南部」というむしろ単一的なネットワークが強調されていたのに対し、中期では琵琶湖から全方位的な関係を強調している変化も無視できない。琵琶湖と言う存在が単一的な結びつきから、まさにネットワークシステムとしての網羅的な関係に変化しつつあると言えるだろう。

#### D) 後期の前方後円墳の造営方式

後期の前方後円墳では、野洲地区に所在する林之越古墳が、まさに突出した規模を誇り、特殊な政治的状況を考える必要を窺わせる。後期になって巨大な前方後円墳が造営される背景には幾つかの要因が想定される。一つは、摂津今城塚古墳や尾張断夫山古墳の造営を典型として語られるもので、「継体王朝」の成立と関係とするとの理解、一つは、見瀬丸山古墳や総社こうもり塚古墳を典型とする強大な権力の整備を想定する考え方、さらには、飛騨広瀬鴻





第4図 後期における前方後円墳の分布図

峠口古墳のように特殊な地域の編成を考える方法などである。林之越古墳に関してはどのような考え方が成立するのか、今少し詳細な年代観などが明らかになった後に考えるものとしたいが、地域内で完結しない大きな問題意識の中で評価する必要があるだろう。

同じく、中期に該当する可能性も存在し、年代決定を保留しておきたい高月町五位塚古墳についても、後期の大型前方後円墳で、林之越古墳と類似する可能性も想定される。この場合、五位塚古墳についても大きな問題意識の中で評価する必要は言うまでもないが、「湖南」と「湖北」のそれぞれ中核地に巨大な前方後円墳が造営されたとも理解できる。まさに「琵琶湖地域」としての特殊性が表出しており、再び琵琶湖地域としての結合性が強調されたものと評価できるかもしれない。

さて、林之越古墳と五位塚古墳を除いた前方後円墳においては、少数の小規模古墳を除いてほぼ40m級に統一されている状況が見出せる。すなわち、この段階では、特殊に大型化したものと少数の小型前方後円墳を除いて、前方後円墳が規模によって差別

化されることはなかったと理解できる。墓制における差別化は、横穴式石室や棺など、墓制の内部に集約されたようで、前方後円墳の意味も変化したと理解できる。

さて、小型の前方後円墳は、古墳群・群集墳の中の盟主墳と言う位置を占めているものが大半で、そうした集団の墓域に埋没した首長層の在り方が見出せる。彼らが前方後円墳と言う墳形を採用した背景には、前方後円墳の意味とともに「首長層」という概念に関しても、大きな変化が予想される。同時に、これらの類型には帆立貝形古墳が含まれる点からすれば、今後資料が増加する可能性が高く、今後の資料増加を待って分析するものとしたい。

一方、40m級の前方後円墳は幾つかのまとまりを持って分布している。すなわち、鏡山グループ、大岩山グループ、石山グループ、高島グループ、高月グループ、天野川グループである。また、有力な円墳で構成される勝堂古墳群を湖東グループとして加えることも可能であり、同時に千僧供岩塚古墳や木村石塚古墳を評価すれば、蒲生南部グループや蒲生北部グループも成立する。このように見れば中期でみたグループからそのまま引き継がれたものが一定数存在しており、中期段階からの連続した造墓方式と認識できそうである。

しかし中期とは異なり、琵琶湖を中心に、有力なグループが造営されている事実が指摘でき、後期の大きな特徴となっている。すなわち、大岩山グループ、石山グループ、高島グループ、高月グループ、天野川グループの存在である。これらは琵琶湖を基軸としたルートとそこから他の地域に向う接点に位置しており、まさに琵琶湖の湖上交通路と陸路との接点に位置するものということが可能である。石山グループは山城へ、高島グループは若狭へ、高月グループは越前へ、天野川グループは美濃へ、それぞれ琵琶湖から分岐し外部社会に向う地点に位置しており、そのルートの中核に大岩山グループが存在する。大岩山グループが琵琶湖と言う存在に強く関与していたであろう点は、その階層的な下位に位置する有力な円墳群を湖岸部に点在させているという、他の地域では見られない特徴とともに、阿蘇凝灰岩石棺が搬入されている事実からも首肯されよう。

大岩山古墳群は、琵琶湖を媒介とした湖上交通のみならず、そこから各地へ展開する広範な長距離交易の基点としても位置していたのである。

これ以外のグループでは、鏡山グループに含んだ穴蔵古墳は、大規模な窯業生産を背景とした首長墓と目されている。岩屋古墳についても、有力方墳であるオーゴ古墳とともに、「湖東南部グループ」と評価できる一方、鏡山窯跡群との緊密性も否定しがたい。鏡山古窯跡群の流通範囲がどの程度あったかの問題も存在するが、これらの前方後円墳についても物流システムの中で評価することも不可能ではないだろう。その他、湖東グループはこの頃から本格的に開発の開始される「湖東北部」の拠点として評価でき、蒲生の南北のグループは前段階から継続で、早い段階で系譜を終了する。

このように見れば、この段階の前方後円墳は2・3の例外を除いて、琵琶湖との関係が強い地域・グループによって造営されており、その被葬者は何らかの形で琵琶湖と結びついている事実が確認できる。この段階では、琵琶湖の求心性が再整理され、その求心性と外部社会への接点を基軸として前方後円墳が造営されたのである。そして、その中心に大岩山古墳群が存在する。まさに、システムとしての琵琶湖地域が完成し、そのシステムの要所に前方後円墳が造営されたのである。

#### E) 前方後円墳の動向から見た琵琶湖周辺地域

このように、琵琶湖地域の古墳時代を概観すれば、琵琶湖と言う存在を軸にしたネットワーク・システムが整備され、編成される過程を見出すことが可能となる。すなわち、前期においては、琵琶湖としての求心性が強調され、琵琶湖地域としての帰属性と結合性の中で、各構成単位としての「地域首長層」が成立した。言い換えれば、琵琶湖地域と言う存在が、外部的に意味を強調されたものではなく、内部的な結合により意味を持ち得た存在と言うことができるかもしれない。その中で、「畿内—琵琶湖—北陸南部」というネットワークが表現されており、琵琶湖がそうしたルートの中継地として意味をもっていた事実が見出せた。このルートは、弥生時代の玉造りなどを踏襲したものかもしれない。

中期になれば、琵琶湖から外部社会に向うルート

が強調されるとともに、琵琶湖地域としての帰属性・結合性が弱まり、地域単位としてのグループの存在が浮かび上がってきた。5世紀と言う「強権的な王権」体制における地域の政治的な動向とも関連しているが、琵琶湖というネットワークが新たな形に再編成される過程として評価することが可能であろう。同時に、琵琶湖から全方位的なルートが強調されており、琵琶湖持つ意味が多分化してきたものと考えられるとともに、この新しく再編成されるネットワークが網羅的な存在であった事実を推察させる。琵琶湖という存在が、内的な意味から外的な意味を帯びてくる段階とも表現できる。

後期になれば、琵琶湖の周辺に大岩山グループを中心とするシステムが完成し、同時にシステムと外部社会との接点を強調した。すなわち、そうしたシステムが外部社会へ向う基点としての地域単位＝グループが前方後円墳を造営した。琵琶湖と言う存在が、内的な帰属性のシンボルに留まらず、広範な社会システムのパーツとして機能を発揮する段階と言うことも可能であろう。これは中期からの動向が完成された姿でもあった。

このように、琵琶湖地域の前方後円墳は、琵琶湖と言う存在を軸にして考えれば、その求心性が強調された段階、そこかの外部へ向うルートが強調された段階、琵琶湖としての存在がシステム化された段階という変遷を経ていることが明らかとなった。その変遷の意味は以下の課題とするが、琵琶湖とは、その周変に住居する人々にとって帰属性のシンボルであり、あるいはそれに依存することによって社会的な生活が保証される存在であるがゆえに、こうした前方後円墳の造営・変遷が生じてきたと言えるだろう。従って、こうした変遷の在り方から「琵琶湖周辺地域」という単位が古墳時代を考える上で有効な単位である点が確認できたと理解し、併せて、この地域概念は、決して「滋賀県」や「近江」という領域概念（操作概念としての地域）からは見えてこない、これは琵琶湖と言う「風土性」とそこでの人々の活動を通じて形成された、言うなれば「凝縮された世界単位」としての「琵琶湖地域」を意味するものである点を認識できたものとしておきたい。



## 2. 古墳副葬品から見た琵琶湖地域の位置

次に副葬品と言う視点から琵琶湖地域の変遷を概観する。古墳の副葬品とは儀礼的側面を支える道具立てと考えられ、その在り方は習俗の問題に還元されるものである。しかし、古墳の儀礼を象徴的立場から理解すれば、そこには儀礼を支える経済、特に典型的な形態での経済が反映されていると理解することも可能である。古墳副葬品に少なからずの威信財が含まれている事実は多くの研究者の共通認識と理解できるところであり、威信財とは極めて経済的な存在である事実は説明の必要もないだろう。ここではそうした視点から、古墳副葬品に現れた経済システムの在り方を、代表的な副葬品の分析から復元し、琵琶湖地域の特質を考える手立てとしてみたい。

### A) 鏡面の副葬状況について

現在琵琶湖地域からはおよそ88面の鏡面が出土している。それらは、正式な発掘調査によって出土したもの<sup>13</sup>のほか偶然の機会<sup>13</sup>で出土したもの、あるいはかつて出土したと言う伝承のみが残るものなども一定数含まれており、その扱いは慎重にすべきものがある。しかし、琵琶湖周辺地域における鏡の分布状況に関しては大まかな傾向を指摘することが可能である。以下、時代別の出土傾向から、古墳時代の鏡面流通の在り方、すなわち経済性の断片を考察する。

①集落遺跡出土鏡面 出土の確認できる88面の中で、集落遺跡（古墳以外）から出土した鏡面が18面含まれている。今回の考察は古墳を対象とするもので、これらは基本的には除外するが、ここでは2点に絞って問題点を指摘しておきたい。

第1点目は、いずれも弥生時代終末から古墳時代前期にかけての年代観で理解できる点である。古墳と集落遺跡の詳細な年代観の検証を行っておらず、また、鏡の出土状態も詳細な年代決定に耐え得るものではないため結論は下せないが、古墳出現以前の年代観で理解できる鏡面も少なからず含まれているようである。特に、舶載鏡と考えられる鏡面（破鏡）に関しては、完形鏡に先立つ漢式破鏡の波及が琵琶湖地域まで及んでいた事実を示している。言い換えれば、弥生時代終末の段階で、琵琶湖地域は一つの鏡面流通体系の中に位置していた事実を示して

いる。古墳時代になって、初めて鏡面が導入・珍重されたと理解することはできないのである。

第2点目は、当該期の有力な集落群において出土が集中する傾向である。具体的には野洲川左岸遺跡群、能登川遺跡群、近江町遺跡群であり、いずれも当該期中核的な遺跡群である。先に指摘した鏡面導入への先駆けが、こうした有力な遺跡群かを中心に展開しているものと考えられる。一方、そうした有力な遺跡群以外においても、少なからずの鏡面が出土している事実は、必ずしも有力な遺跡群が鏡面を独占していたものではない事実、言い換えれば、鏡面と言う「特種な製品」の流通体系が末端の集落にまで及んでいた事実を示している。古墳時代の開始にあたっては、こうした末端まで張り巡らせた流通体制を確実に評価する必要があるだろう。

②前期古墳における鏡面副葬 前期とした時間幅においては、「湖南」地域が出土数において圧倒的優位に立っており、古墳の調査傾向も考慮すべきではあるが、「湖南」地域が琵琶湖地域における鏡面受容の中心であると評価することが可能である。これは、集落遺跡出土の鏡面も「湖南」地域にやや集中する傾向からも首肯できる。

さて、「湖南」地域をやや詳しく見れば、中小の円墳系列から三角縁神獸鏡が分散的に出土しており、和迩大塚山古墳や安養寺大塚越古墳という地域を代表する前方後円墳から三角縁神獸鏡が出土していない事実と対照的な関係を表現している。三角縁神獸鏡を「大和王権から配布された鏡」と理解すれば、地域の基礎単位としての首長層が三角縁神獸鏡の配布対象として強調される半面、それらの階層的上位に立つ「地域首長層」は配布対象として強調されていないと言いかえることもできるであろう。

さらに、和迩大塚山古墳の盤龍鏡を三角縁神獸鏡に先立って、あるいは異なる方法で日本列島に導入・流通したもの<sup>14</sup>、安養寺大塚越古墳の二神二獸鏡を同様に、かつ、小型の素文鏡を集落遺跡から出土する鏡群に見た文脈の中で評価するならば、「地域首長層」は一定の鏡面入手のルートを保ち、そのルートの枠内において鏡面副葬を行ったものと理解できそうである。この入手ルートは地域内の基礎単位の首長層に対しても機能していた事実は、山

番号	所在地	古墳名	種別	墳形	内部主体	年代	鏡式	径	鏡の番号	備考
1	安土町	鵜草山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	船載牛鳳鏡 /	15.0	銘文	
2	安土町	鵜草山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	ホウ製二神二獸鏡 /	13.4		
3	大津市	織部古墳	古墳	円墳	不明	前期	船載三角縁四神四獸鏡 /	23.1	銘文	
4	草津市	追分古墳	古墳	円墳	棺直葬	前期	不明		特定不能	出土の疑問有り
5	草津市	北谷11号墳	古墳	円墳	粘土槨	前期	ホウ製方格規矩鏡 /	23.8		
6	志賀町	和辻大塚山	古墳	方円	粘土槨	前期	船載盤龍鏡 /	13.0	銘文	
7	野洲町	大岩山古墳	古墳	円墳	不明	前期	船載三角縁画像文帯盤 /	24.5		
8	野洲町	大岩山古墳	古墳	円墳	不明	前期	船載三角縁二神三獸車 /	25.7	銘文	
9	野洲町	大岩山古墳	古墳	円墳	不明	前期	船載獸帯鏡	23.0	銘文	
10	野洲町	大岩山古墳	古墳	円墳	不明	前期	船載天王日月獸文帯二 /	21.3	銘文	
11	野洲町	大岩山古墳	古墳	円墳	不明	前期	ホウ製鏡 /	14.0	破片	
12	野洲町	古富波山古	古墳	円墳	不明	前期	船載三角縁三神五獸鏡 /	22.0	銘文	
13	野洲町	古富波山古	古墳	円墳	不明	前期	船載三角縁四神四獸鏡 /	21.9	銘文	
14	野洲町	古富波山古	古墳	円墳	不明	前期	船載三角縁四神二獸鏡 /	21.8	銘文	
15	野洲町	天王山古墳	古墳	円墳	不明	前期	ホウ製画像鏡 /	26.5	擬銘帯	
16	野洲町	天王山古墳	古墳	円墳	不明	前期	ホウ製三角縁獸文帯三獸鏡 /	21.8		
17	八日市市	雪野山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	船載三角縁唐草文帯四 /	24.2	銘文	
18	八日市市	雪野山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	船載三角縁四神四獸鏡 /	24.2		
19	八日市市	雪野山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	船載三角縁波文帯盤龍 /	25.2		
20	八日市市	雪野山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	ホウ製夕龍鏡 /	26.5		
21	八日市市	雪野山古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	前期	ホウ製内行花文鏡 /	24.0		
22	栗東町	安養寺大塚	古墳	方円	粘土槨	前期	船載斜縁二神二獸鏡	14.2	銘文	
23	栗東町	安養寺大塚	古墳	方円	粘土槨	前期	ホウ製素文鏡	9.3		
24	栗東町	毛刈古墳	古墳	円墳	棺直葬	前期	ホウ製変形文鏡	9.0		
25	栗東町	下味古墳	古墳	円墳	粘土槨	前期	ホウ製龜齒文鏡	6.6		西(第2)主体
26	栗東町	下味古墳	古墳	円墳	粘土槨	前期	ホウ製内行花文鏡	9.3		東(第1)主体
27	栗東町	出庭亀塚古	古墳	方円	粘土槨	前期	ホウ製三角縁獸文帯三 /	21.7		
28	栗東町	山の上古墳	古墳	円墳	棺直葬	前期	船載斜縁二神二獸鏡	18.1	銘文	
29	栗東町	六地藏岡山	古墳	円墳	棺直葬	前期	船載三角縁獸文帯三神 /	22.1	銘文	
30	栗東町	六地藏岡山	古墳	円墳	棺直葬	前期	船載盤龍鏡 /	11.1		
31	竜王町	八重谷古墳	古墳	不明	不明	前期	不明		特定不能	県概要
32	浅井町	田川山	古墳	円墳	不明	中期	ホウ製珠文鏡	7.5	破片	東博
33	浅井町	雲雀山2号墳	古墳	円	棺直葬	中期	ホウ製五獸鏡	11.7		
34	浅井町	雲雀山3号墳	古墳	円	棺直葬	中期	ホウ製四獸鏡	10.7		
35	安曇川町	田中古墳群	古墳	不明	不明	中期	神獸鏡?	10.5		田中神社所蔵
36	今津町	円山古墳	古墳	円墳	不明	中期	不明		神獸鏡?	高島郡誌
37	近江八幡	供養塚古墳	古墳	方円	棺直葬	中期	不明		特定不能	蒲生郡志
38	近江八幡	東車塚古墳	古墳	円	不明	中期	船載四禽鏡	7.1		
39	大津市	木岡古墳群	古墳	不明	不明	中期	不明		特定不能	新大津市史
40	大津市	真野古墳	古墳	円墳	棺直葬	中期	振文鏡			
41	湖北町	種路古墳	古墳	円墳	不明	中期	ホウ製四神鏡	8.6		
42	高月町	湧出山4号墳	古墳	円	竪穴式石槨	中期	ホウ製乳文鏡	7.9		
43	虎姫町	北山古墳	古墳	方円	棺直葬	中期	船載唐草文帯獸帯鏡 /			
44	虎姫町	丸山古墳	古墳	円墳	棺直葬	中期	船載唐草文帯細線式獸 /	11.5		
45	米原町	石淵山古墳	古墳	方円	横穴式石室	中期	船載内行花文鏡	11.7		
46	水口町	泉塚越古墳	古墳	方円	不明	中期	ホウ製内行花文鏡	13.0		
47	栗東町	新開1号墳	古墳	円墳	粘土槨	中期	ホウ製五獸鏡	8.4	北遺構	
48	栗東町	新開1号墳	古墳	円墳	粘土槨	中期	ホウ製画像鏡	19.5	南遺構	
49	栗東町	新開1号墳	古墳	円墳	粘土槨	中期	ホウ製盤龍鏡	13.7	北遺構	
50	浅井町	塚原古墳群	古墳	円墳	横穴式石室	後期	ホウ製内行花文鏡	9.4		浅井中学
51	安曇川町	冠掛古墳	古墳	不明	不明	後期	不明			清野謙次
52	近江町	塚の越古墳	古墳	方円	横穴式石室	後期	四神四獸鏡			出土に疑問有り
53	近江町	山津照神社	古墳	方円	横穴式石室	後期	ホウ製五獸鏡	13.2		
54	近江町	山津照神社	古墳	方円	横穴式石室	後期	ホウ製五鈴乳文鏡	8.5		
55	近江町	山津照神社	古墳	方円	横穴式石室	後期	ホウ製内行花文鏡	7.1		
56	木ノ本町	大音	古墳	不明	横穴式石室	後期	不明		特定不能	伊香郡志
57	木ノ本町	古橋	古墳	円墳	横穴式石室	後期	ホウ製四獸鏡	15.3		敦賀郷土博物館
58	高島町	稲荷山古墳	古墳	方円	横穴式石室	後期	ホウ製内向花文鏡	15.6		
59	中主町	木部天神前	古墳	円墳	横穴式石室	後期	ホウ製七獸鏡	10.3		
60	長浜市	垣籠古墳	古墳	方円	竪穴式石槨	後期	ホウ製変形乳文鏡	13.6		
61	能登川町	猪子山古墳	古墳	不明	横穴式石室	後期	不明		特定不能	遠山荒次
62	彦根市	正法寺	古墳	不明	横穴式石室	後期	不明		特定不能	
63	水口町	高山大路山	古墳	円墳	横穴式石室	後期	ホウ製四獸鏡	10.9		
64	野洲町	甲山古墳か	古墳	円墳	横穴式石室	後期	船載唐草文縁薄肉刻七獸鏡	23.0	魚佩痕・銘	山川七左衛門
65	野洲町	甲山古墳か	古墳	円墳	横穴式石室	後期	船載唐草文縁薄肉刻七獸鏡	22.4	銘文	山川七左衛門
66	野洲町	円山古墳か	古墳	円墳	横穴式石室	後期	ホウ製四神四獸鏡	15.3		兵主大社所蔵
67	栗東町	安養寺薬師	古墳	不明	不明	不明	ホウ製四乳鏡	11.2		

表2-1 琵琶湖地域出土の鏡面一覧



番号	所在地	古墳名	種別	墳形	内部主体	年代	鏡式	径	鏡の番号	備考
68	栗東町	灰塚山古墳	古墳	不明	不明	不明	不明		特定不能	
69	竜王町	薬師岩ヶ峰	古墳	不明	不明	不明	不明		特定不能	蒲生郡志
70	浅井町	今任遺跡	集落			前期	不明		特定不能	滋賀県遺跡目録
71	近江町	高溝遺跡	集落			前期	ホウ製重圓文鏡	3.6		
72	近江町	高溝遺跡	集落			前期	ホウ製素文鏡	3.3		
73	大津市	上高砂遺跡	集落			前期	方格規矩鏡		破鏡	
74	大津市	堂谷遺跡	集落			前期	ホウ製歯文鏡	3.9		
75	草津市	北萱遺跡	集落			前期	ホウ製素文鏡		破鏡	
76	高島町	鴨遺跡	集落			前期	ホウ製斜行歯文鏡	6.7		
77	多賀町	木曾遺跡	集落			前期	ホウ製珠文鏡		破鏡	
78	能登川町	伊庭遺跡	集落			前期	ホウ製鳥文鏡	10.0	破鏡	
79	能登川町	斗西遺跡	集落			前期	舶載内行花文鏡	10.2	破鏡	
80	能登川町	斗西遺跡	集落			前期	ホウ製振文鏡	6.0		
81	彦根市	松原内湖遺	集落			前期	ホウ製素文鏡	3.2		
82	守山市	金ヶ森	集落			前期	ホウ製珠文鏡	5.4		
83	守山市	下長遺跡	集落			前期	ホウ製素文鏡	2.6		
84	守山市	下長遺跡	集落			前期	ホウ製素文鏡	3.7		
85	守山市	服部遺跡	集落			前期	ホウ製内行花文鏡	7.8		
86	栗東町	高野遺跡	集落			前期	ホウ製歯文鏡	7.1		
87	安土町	沙々眞神社	不明			不明	七鈴鏡		特定不能	蒲生郡志
88	野洲町	野洲町出土	不明			不明	ホウ製乳文鏡	11.2	饗庭綱氏	

表2-2 琵琶湖地域出土の鏡面一覧

の上古墳や岡山古墳の舶載鏡や下味古墳や毛刈古墳の小型ホウ製鏡の出土から推察できる。すなわち、鏡面の流通体系が、「湖南」地域には綿密に張り巡らされており、これを背景として鏡面副葬の優位性が形成されたと理解しておきたい。そうした体制の中で、三角縁神獸鏡がむしろ階層的下位の古墳を強調して配布される。地域と大和王権の複雑な関係を多角的に分析する必要を感じるが、鏡面と言う側面における流通の分断とも評価できよう。

こうした鏡面の入手ルートが「湖南」に限定的なものではない事実は、「湖北」の三川丸山古墳の獸帯鏡や安土瓢箪山古墳の鏡群が示している。特に安土瓢箪山古墳においてはキ鳳鏡とホウ製二神二獸鏡が出土している。後者の鏡面は共通文様鏡群と分類される畿内工房の作品と考えられ、大和王権経由での入手は否定できないが、少なくとも三角縁神獸鏡ほど明確な意図を持った配布の対象ではなかったと考えて大過ない。一方、後者については現在国内では14面のみが知られている。その内、遺跡の性格が異なる沖ノ島17号遺跡と実態に疑問の残る八幡美濃山王塚古墳を除外した12遺跡で見れば、三角縁神獸鏡と共伴して出土しているものは神戸市へボソ塚古墳と倉吉市国分寺古墳の2例であり、他の漢式鏡と共伴するもの2例、ホウ製鏡とセットをなすもの2例、単独で存在するもの5例、実態の確認できないもの1例となる。また、分布状況は九州と瀬戸内東

部を中心とする近畿地方に偏った在り方を示し、前者が弥生時代に溯る中小墳墓を含む一方、後者は定式化した古墳からの出土が多い。前者が先行して導入され、その後後者が導入されたという異なる入手経緯も想定できる。安土瓢箪山古墳の場合は瀬戸内東部グループの延長線上に位置している。そしてこの鏡式は、大和など畿内中枢部からは1面も出土しておらず、三角縁神獸鏡とは異なる経路で流通したと判断できる。琵琶湖から瀬戸内東部を結ぶ地域の個々の鏡面で、独自の鏡面の流通ルートを示しているものと判断できよう。いずれにしろ、安土瓢箪山古墳は三角縁神獸鏡とは全く異なる鏡面入手のルートを保有していた可能性が窺えるのである。琵琶湖地域最大の前方後円墳においても、「湖南」で見たような鏡面の在り方が貫徹されていたのである。

一方、こうした独自の入手経路とは全く異なる状況を示しているのが雪野山古墳である。三面の三角縁神獸鏡は言うまでもなく大和王権を中心とする再分配構造に位置する鏡面であり、2面の大型ホウ製鏡についても、必ずしも三角縁神獸鏡と同様の配布形態を示すものではないが、三角縁神獸鏡とセットをなす出土例は少なからず指摘でき、かつ、鏡式的にホウ製鏡群の中心に位置することから、三角縁神獸鏡と同様の配布経路による流通となる可能性が高い。すなわち、雪野山古墳の鏡面群は、大和王権の配布すなわち再分配構造に従ったもので構成され、

九州と近畿地方に分布が集中し、あるいは2次に渡る輸入が想定できる。  
 この場合は、九州が古く近畿が新しい。同時に輸入主体の差異を示している  
 可能性が考えられる。いずれにしろ、近畿からの出土は少ない。



第5図 キ鳳鏡出土分布図

独自の鏡面入手経路は全く表現されていない。言い換えれば、鏡面と言う側面においては在地的な独自の流通体系を集約した形で造営されたものではなく、大和王権の再分配構造に全面的に依存しものと言えるだろう。

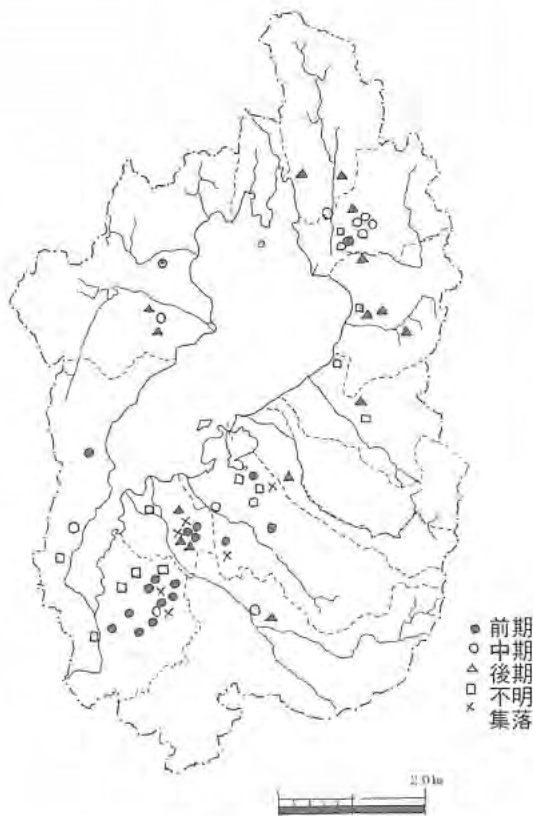
これは、鏡面と言う側面に限定し得る傾向ではなさそうである。雪野山古墳を特徴付ける副葬品として、ユキに装着された状態の大量の銅鏃群が存在する。これに関して大和王権の軍事編成の一翼を担う被葬者の性格が考えられているが、言い換えれば大和王権の権威を背景とした被葬者と表現することも可能となる。鏡面に見た在り方とまさに同一の性格が指摘できるのである。

以上、前期における鏡面副葬の在り方から、「湖南」を中心に張り巡らされた鏡面流通体系の存在と、大和王権の権威を前提とした再分配構造の流通体系という二者が存在する可能性が窺い知れた。前者は地域の集落群やそれ以前の墓制系譜との連関性が濃厚であり、あるいは「地域」を成立せしめている琵琶湖に密接した在り方を指向するのに対し、後者は地域の中に忽然と出現している感がぬぐえない。そして、前者の流通体系に対して、分断とも考えられる形態で、「湖南」の中小古墳から三角縁神獸鏡が

出土している。大和王権の政策的な方法を吟味する必要や、一見前者と見える体系の中にも後者の在り方が隠されている可能性も考えられるが、ここでは、「在地的な流通経路の在り方」と「大和王権からの配布と言う在り方」とが互いに抵触する存在であった可能性を指摘することとしておきたい。

③中期古墳における鏡面副葬 中期になれば、鏡面の出土数が減少し、鏡面への珍重が安定したものに変化していったと理解できる。一方、分布傾向は拡大させ、しかも中小古墳への副葬が増加する。それらには一部に舶載鏡を含むが、基本的にはホウ製鏡が主体となっている。こうした事実関係を評価するなら、三角縁神獸鏡や中心系列とされる鏡式の制作停止という大きな変革が存在するにもかかわらず、ホウ製鏡を中心とした。中小古墳へも至る安定した流通経路が整備されたと認める必要があるだろう。一部の舶載鏡については、同時代に導入された踏み返し鏡と考えられ、こうした舶載鏡の導入ルートをどのように考えるかが問題となってくる。前期以来の鏡面の流通体系が連綿と維持されている状況を考えるのも一案であろう。こうした傾向の中で、新開1号墳のように有力な古墳に複数面副葬される。これが、地域の編成などに対してどのような意味を





第6図 鏡面出土古墳分布図

持っているか、現時点では評価できない。また大和王権との関係についても、現状では保留せざるを得ない。

いずれにしても、現時点においては、中期鏡面における明確な再分配構造は見出しがたく、むしろ、在地的ネットワーク的な流通体系を考えてしかるべき状況である。しかし、その中においては、畿内工房で製作された可能性が高いホウ製鏡が中心を占めており、畿内工房が流通の中心を形成している事実は正しく評価しておきたい。また、前期段階では确实視される一部地域での生産についても考慮しておく必要があるかもしれない。明確な解答は用意できないが、畿内工房を中心とした多元チャンネルの流通システムが、従来の流通システムをより強化した形態であると想定しておきたい。

④後期古墳における鏡面副葬 後期になっても中期の傾向に変化はない。ホウ製鏡が分布の中心であり、山津照神社古墳のように有力な古墳に複数面副葬されるとともに、中小古墳へも確実に副葬されている。後期においても安定した鏡面の流通経路が機能していたのである。ただし、こうした傾向に対

して2つの問題点を指摘しておきたい。

1点目は、花田勝広氏の慧眼によって、山川七左衛門氏旧所蔵鏡が甲山古墳出土の可能性が指摘された点である<sup>(18)</sup>。言うまでもなく百済武寧王陵出土鏡と同汎関係にある鏡面で、その入手経路が注目される。甲山古墳は現在、調査・整備の途中のため、詳細な分析はできないが、馬甲や金糸の存在から、その被葬者は朝鮮半島北部の礼制に通じていた可能性も考えられ、しかも彼は最も遠くまで運ばれた阿蘇凝灰岩製石棺に葬られていた。こうした朝鮮半島を含めた長距離交易に関与した被葬者の姿は、同じく武寧王陵同范鏡を出土した綿貫観音山古墳とも相通じている。被葬者の大和王権に対する関係などはひとまず、このように長距離交易に関与したであろう古墳被葬者が日本列島内に点在し、優品とされる鏡面を地域にもたらしめている事実は、結果として、地域における鏡面流通体系をより充実・洗練させていった事実は首肯されねばならない。踏み返し鏡群に視野を広げれば、決して畿内中心に分布するものではなく、北部九州にややまとまる以外、列島内に点在している。その状況からは大和王権からの再分配は想定し難く、まさに長距離交易の主体が地域に点在していたと理解すべきである。地域における鏡面流通のシステムが再び東アジアへと広く開かれていったのである。

第2の問題点は、当該期の古墳が最も多く調査されている大津北郊地区において鏡面が出土していない事実である。猪子山古墳群や塚原古墳群、古橋古墳群など一般の古墳群から鏡面が出土している事実と対照的な現象である。この問題点は、その被葬者層が渡来人と想定されている事実と関係する可能性が考えられる。すなわち、朝鮮半島での鏡面副葬は例外的な現象であり、そうした習俗が大津北郊の古墳群に反映されている可能性は考慮する必要があるだろう。同時に大津北郊古墳群は全国でも屈指の大群集墳地帯を形成している事実との関連で理解する方法である。そこにおいては、特殊な集団編成がなされていた可能性が指摘できるが、そうした特殊な集団が、地域の鏡面流通経路から疎外・独立していた可能性も注意されるべきである。大和や河内の大型群集墳においても鏡面はほとんど出土しない事実

とあわせて検討する必要があるだろう。いずれにしろ、必要とするところには流通するが、必要としないところには流通しないという、より商品経済的な在り方への萌芽見出すことも必要かもしれない。

⑤鏡面にみる流通体系の変化 以上、琵琶湖地域を中心に鏡面の出土傾向を概観した。鏡面の詳細な型式分類等の手続きを経ておらず、雑駁な議論となった点や、琵琶湖地域に限定したため地域の特殊性と一般傾向を混同させた点など、多くの異論が存在するとは考えるが、琵琶湖地域の鏡面の在り方は、以下のとおりに整理しておきたい。

弥生時代後期後半から終末期の頃、琵琶湖地域にも鏡面が流通する。小型ホウ製鏡と漢式破鏡である。九州における鏡面重視の思想が物資を伴って、おそらく瀬戸内を介してもたらされたと理解されている。同時に、三川丸山鏡を代表とする完形の後漢鏡の流通も開始する。これらも北部九州・瀬戸内経由でもたらされたと考える以外、青龍3年銘鏡や景初4年銘鏡が出土している丹後地域など、伝統的に大陸諸国と交流を持っていたであろう複数の地域についても窓口であった可能性も否定できない。さらに、「卑弥呼の鏡」と言う一括大量入手方式によって流通した鏡面も想定できる。こうした複数の経路や方式が互いに関連し補完することによって鏡面流通体系が形成された。同時に、この流通体系の中でホウ製鏡が制作された可能性も想定できる。いずれにしろ、こうした鏡面流通体系は、古墳時代の開始直前にはほぼ完成していたようで、その後の鏡面流通にも少なからずの役割を果たした点も説明の必要はないだろう。なお、この体系の中では畿内を中心に分布する鏡式を指摘することも不可能ではなく、一部に三角縁神獸鏡の先駆的な在り方形形成されていた可能性も否定できない。しかし、少なくとも琵琶湖地域はその動向に含まれてはいなかったようである。

こうした鏡面流通体系に対し、三角縁神獸鏡は明確な再分配構造を形成し、かつ、強い政治的な意図を伴って流通する。あるいは初期の大型ホウ製鏡もその意図が存在した可能性も指摘できる。三角縁神獸鏡の意味については省略するが、特殊な制作状況やその分布状況からすれば、何らかの中国王朝の権威を背景とした鏡面であり、大量に、かつ連続的に

制作・流通している事実からすれば、中国王朝の権威を背景とした流通体系を推し進めようとした意図が見出せる。すなわち、それ以前に形成されていた鏡面流通体系に相反する、新しい意図を持った流通体系とすることが可能かもしれない。

しかし、三角縁神獸鏡に込められた権威の低下や鏡面の珍重の安定化などを背景に、三角縁神獸鏡に見られる流通体系は4世紀後半には瓦解し、三角縁神獸鏡の特殊な制作体系も消滅する。一方、大型ホウ製鏡を生出した畿内工房は、その鏡式自体が弥生時代以来の流通体系による鏡面や技法を基礎とし、かつ早い段階から小型製品などを一般に流通させていたと考えられる点から、一般の流通体系の最大鏡面供給主体として変質した可能性が指摘できる。こうした方法で鏡面流通の主導を握っていった点は注意しておきたい。

中期は基本的にはそうした畿内工房が中心となって鏡面が流通する。ただし、一定量の舶載鏡が地域に存在する事実は、独自の鏡面入手ルートが依然として機能しており、畿内工房と一体となって、末端まで確実に及ぶ流通体系を支えた可能性も評価すべきかもしれない。

そうした安定した体系の中で中期後半から後期にかけて、再び南宋を中心に舶載鏡が特徴的に持ち込まれ、同時にこれに触発された形で新たなホウ製鏡が制作される。倭五王の時代などとも表現される強力な専制体制と体制下における組織的な対外交渉が、こうした鏡面の活性化と結びついた点は言うまでもない。そうした状況の中でその分布は畿内を中心とも断言しがたく、むしろ、地域において点的に存在する、鏡面のみならず他の渡来系文物をも集中させる古墳の存在を評価すべきであると考えられる。すなわち、地域毎に鏡面流通の核が形成され、これを前提として地域毎の流通体系が確立したと考える。その古墳の被葬者達は、大和王権の一員として対外交渉に参加したとしても、それを契機に在地を基点とする流通体系を整備させ、独自の交易ルートを切り開いたかのような状況を生み出していった。地域の核と畿内工房、両者が一体となった流通形態が完成したのである。そうした段階を経て、例えば鈴鏡は関東で多く出土するなど、畿内の鏡面工房も畿内と言



番号	所在地	古墳名	墳形	規模	埋葬施設	年代	甲	冑	その他	備考
1	余呉町	黒田長山4号墳	円墳	17	棺直	中期	横板板鋳留短甲			北棺
2	余呉町	黒田長山4号墳	円墳	17	棺直	中期	横板板鋳留短甲			南棺
3	浅井町	雲雀山2号墳	円墳	17	竪穴式石槨	中期	三角板鋳留短甲			
4	虎姫町	北山古墳	方円	40	棺直	中期	横板板鋳留短甲			
5	安土町	瓢箪山古墳	方円	132	竪穴式石槨	前期	方形板皮綴短甲			
6	近江八幡市	供養塚古墳	方円	50	竪穴式石槨	中期	横板板鋳留短甲			
7	八日市市	雪野山古墳	方円	70	竪穴式石槨	前期	木甲	小礼皮綴式冑		
8	野洲町	宮山1号墳	円墳	25	横穴式石室	後期	小礼珪甲			
9	野洲町	甲山古墳	円墳	40	横穴式石室	後期	小礼珪甲			
10	栗東町	大塚越古墳	方円	100	粘土槨	前期	三角板皮綴短甲			
11	栗東町	椿山古墳	方円	99	粘土槨	中期	三角板皮綴短甲			頸・肩
12	栗東町	新開1号墳	円墳	36	棺直	中期	三角板皮綴短甲	三角板皮綴式衝角付冑		頸2・肩2
13	栗東町	新開1号墳	円墳	36	棺直	中期	三角板鋳留短甲	小礼鋳留式肩庇付冑		箆手
14	栗東町	新開1号墳	円墳	36	棺直	中期	横板板皮綴短甲			脛当
15	栗東町	新開1号墳	円墳	36	棺直	中期	横板板鋳留短甲			胸当
16	水口町	泉塚越古墳	方円	60		中期	三角板皮綴短甲	金鋼製小礼鋳留式肩庇付冑		頸2・肩2
17	水口町	泉塚越古墳	方円	60		中期	三角板鋳留短甲			
18	草津市	追分古墳	円墳	46	粘土槨	前期	甲冑片			
19	草津市	南山田所在	不明			中期	三角板皮綴短甲			古墳特定不能
20	大津市	和迹大塚山古墳	方円	72	粘土槨	前期	甲冑片			
21	今津町	円山古墳	円墳			中期	甲冑片			

表3-1 琵琶湖地域出土の甲冑一覧

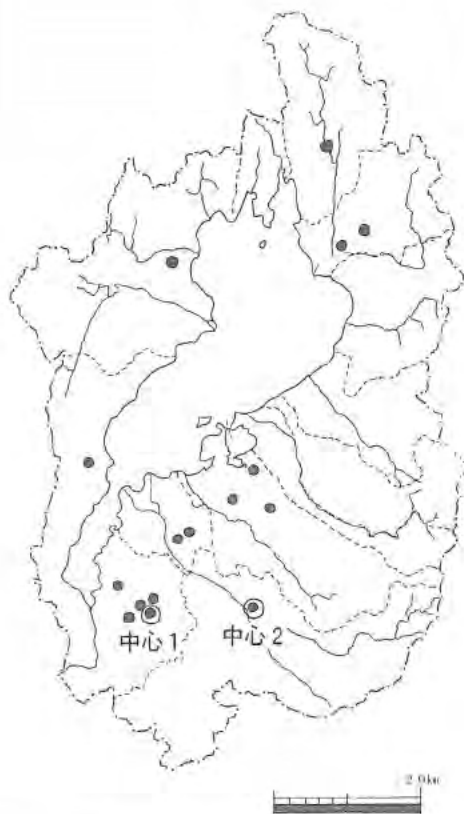
う発信性を背景に、独自のな地域との関係を取り結んでいった可能性も指摘できるだろう。

#### B) 甲冑の出土状況について

現在県内からは、不確実なものを含めて20領の甲と4領の冑、13のその他武具が出土しており、出土古墳は、特定不能古墳を含めて16基を数える。これらは、全国的な出土数から見ればわずかなものであり、詳細な分析を加えるにはまだ、十分な数量とは言えない。従って、ここでは、年代観毎に傾向と問題点を指摘するに留める。

①前期における甲冑 前期に分類される古墳5基から甲冑の出土が確認されているが、この内、安養寺大塚越古墳と追分古墳は、もはや中期に近い年代であり、甲冑出土の増加する年代に該当する。その他の3古墳においても和迹大塚山古墳は甲冑片とのみ報告されたもので、ここでは、安土瓢箪山古墳と雪野山古墳のみを問題点として取り上げる。安土瓢箪山古墳では方形板短甲のみが出土するのに対し、雪野山古墳においては小礼皮綴冑と木甲が出土している。これは両者の年代観の差異に起因する現象と理解することが妥当であろうが、同時に甲冑流通の問題を反映している可能性も考えられる。雪野山古墳出土の小礼皮綴冑は舶載品の可能性も想定される高い技術で制作されたもので、あるいは中国王朝の権威を示すものとして日本列島内に分布したようで

ある。雪野山古墳をはじめ、椿井大塚山古墳、西求女塚古墳、黄金塚2墳、妙見山古墳など、畿内および周辺の有力な古墳に副葬されている事実が示唆的である。一方、方形板短甲は、朝鮮半島の甲冑をモデルに日本列島内で改変され生み出され、その先行型式である縦板短甲を加えてみても、紫金山古墳や茨木將軍塚古墳、園部垣内古墳などの有力な古墳から出土する一方、谷口古墳などの中小古墳からも出土する点に特徴が指摘できる。そして、両者が共伴して出土しているのが、山城の谷1号墳のみである事実からすれば、両者は異なる流通経路に位置していた可能性が浮かび上がる。時間的・数量的な関係を考慮する必要もあるが、前者が極めて特定の意図を持った流通であるのに対し、後者は畿内に分布の中心を持つものの、九州などより広範囲に分布する状況からすれば、むしろ一般の流通形態に近いと理解することも可能であるだろう。いずれにしろ、安土瓢箪山古墳と雪野山古墳における保有甲冑の形式差は、時間的な差異とともに、両者が立脚する流通体制の差異を表現していると理解する必要が存在する。そして、これは鏡面で見えた両者の差異にも関連する可能性も考えられ、前期古墳の在り方全般を考える上で重要な視点と言い得るだろう。こうした意味から、安土瓢箪山古墳との鏡面での類似性が指摘できる和迹大塚山古墳において甲冑片と報告され



第7図 甲冑出土古墳分布図

ている鉄製品の実態を解明する作業の必要性を指摘しておきたい。今後の課題である。

こうした動向の後、安養寺大塚越古墳に三角板短甲が副葬される。あるいは追分古墳の短甲もこの型式に含まれる可能性が高いと考える。これらに関しては、技術的に方形板短甲からの系譜が想定され、その意味からは安土瓢箪山古墳に見た流通経路に位置するものとも理解できる。しかし、三角板短甲によって技術的な統一が達成され、かつ、大量生産が開始される点を評価すれば、安土瓢箪山古墳の流通体制とは一定距離を置いたものと理解しておくべきと考える。さらに、追分古墳と言う中小古墳においても甲冑が副葬されている事実、こうした現象が全国的にも散見できる事実は、本格的な甲冑流通体制が整備されつつある状況を示すものと考えられ、中期に甲冑が象徴的に出土する先駆けとなる現象と理解する必要はあるだろう。

②中期古墳における甲冑 中期になれば、10基の古墳から甲冑の出土が確認できる。全国的には莫大な数量の甲冑が出土しており、中期を特徴付ける副葬品となっている。こうしたデータからすれば、

琵琶湖地域のみにおいて数量的な分析を行うことには危険を感じるが、ここでは、全国的な研究成果を参考にしつつ問題点を抽出する。なお、中期の甲冑を議論する場合は、多くの場合、軍事制度、特に常備軍との関係で論じられることが多い。しかし、ここでは、古墳と言う埋葬儀礼に伴う威信財として甲冑を扱い、その分布傾向からは、威信財贈与と言う経済的・流通的な問題を考えると言う立場に立ち、軍事制度の問題には必要以上に踏み込まない。

さて、琵琶湖地域の中期甲冑の出土状況を見れば、分布の核となる古墳が存在すると言う特徴を指摘できる。すなわち、新開1号墳と泉塚越古墳である。前者は新式甲冑を含む複数セット副葬の典型例として扱われるもので、後者は複数の頸甲・肩甲を含み、かつ、金銅製の冑を含む点から、甲冑分布における一つの核的の在り方と推定する。

最新式を含む甲冑の複数セット埋葬の古墳は、畿内における大量副葬古墳が存在するほか、雲部車塚古墳や月の岡古墳など全国的に点在する。そして、そうした古墳を核として、さらに一般の甲冑が地域内に流通した。これは三角縁神獣鏡が畿外においては例外的な分布の核を形成している以外、畿内一元的であった事実と比較し、その分布のシステム・制度はまさに完成されつつあるものと言うことができるであろう。甲冑の流通は大和王権一地域の核となる古墳—一般の古墳という二重に形成された再分配構造を採用しているのである。

さらに、こうしたシステムの地域的な中核と目される新開1号墳は、その存在する野洲川下流グループにおいては首長系譜に位置する古墳ではなく、基礎単位の首長墓、すなわち2番手に位置する古墳である事実が指摘できる。地域の首長墓である椿山古墳においても、前方部の副次埋葬ではあるがセット関係を成す甲冑が出土しており、甲冑副葬古墳における逆転現象を前期古墳における鏡面副葬で指摘できた「分断」と言う文脈では説明できない点が確認できる。むしろ、畿内とりわけ大王墓古墳群においても、陪墳とされる古墳や必ずしも盟主墳とは言いつけられない古墳において甲冑の大量埋葬が認められる事実、すなわち、大王を取り囲む集団内部において、内部的な制度・システムとして甲冑保有の体制が整



明らかに畿内を中心とする分布圏が形成されているが、他に九州と関東にも多く存在する。九州は原料たる金銅板の輸入にかかわった可能性も考えられる。



金銅製甲冑の分布

小札冑は明らかに畿内中心の分布であるが、短甲は九州、山陰、関東へ及んでいる。九州、石塚山古墳における小札冑の出土は注目すべきであろう。



前期甲冑の分布

第8図 主要甲冑出土古墳分布図

備されつつある状況と類似すると考える。他の地域においても甲冑分布の核となるような古墳に円墳などが多く、あるいは突然造営される前方後円墳などが指摘される。これらを、新興の首長層が積極的に大和王権に結びついた結果とも考えることも不可能

ではないが、新開1号墳と同じように、集団内部的なシステム・制度として甲冑を保有する古墳が存在する側面を否定することはできないであろう。この段階においては、大和王権を中心とする地域への甲冑流通の体制が整備されるとともに、これを受け入

れる地域の集団内部においても、甲冑を保有する体制が整えられつつあった。野洲川下流グループは、まさにそうした体制を先進的に整えることによって、琵琶湖地域の中での地位も確保していったのである。

一方、泉塚越古墳は金銅製冑の存在が重視される。金銅製の甲冑は全国で20数例ほどが出土しているが、時間・数量両面において限定的であり、かつ、五条猫塚古墳や祇園大塚山古墳、西小山古墳などの特注品とも考えられる製品を含んでいる。さらに、所謂「畿内の甲冑大量埋葬古墳」からは、野中古墳において三尾鉄が出土している以外、基本的には出土していない。すなわち、通常の甲冑の流通ルートに拠るものではなく、特種な条件下における配布を考えるべきかもしれない。もちろん、大山古墳からの出土も伝えられている事実からすれば、その分布の中心が大和王権に存在する事実と言うまでもなく、少なくとも、畿内周辺に関しては特定の古墳に対して特定の甲冑を流通させるという、第2の体制が大和王権の周辺に形成されていたと考えられるのである。泉塚越古墳は、新開1号墳とは異なる性格を備えていた可能性が高いと判断できよう。

なお、金銅製甲冑についても、金銅素材を対外交渉で獲得したという考えも存在し、九州や関東においても同製品少なからず分布している状況は、それらの地域での生産・流通を想定する余地が残されている。畿内周辺の第2の流通体制がどの程度の範囲をカバーしたものであるかなど、依然問題点が多い点は言うまでもないだろう。

再び琵琶湖地域における甲冑分布を見れば、必ずしも各グループの首長層が甲冑の分布の核とはなっていない事実が指摘できる。蒲生郡西部グループの首長墓である供養塚古墳では短甲のみ1領の出土であり、墳形や優れた埴輪祭祀に比して、甲冑に関しては中小古墳と同じ扱いを受けていると判断される。供養塚古墳一例のみからの判断であるが、グループの首長層が必ずしも甲冑分布の核とはなっていない事実が確認できる。これは、野洲川下流グループ（新開1号墳）を中心とする甲冑の流通ルートが、グループ間相互においても機能していたであろう事実を想定させる。甲冑保有のシステム・制度とは、中核となるグループが存在し、そこからグループ間

相互を結ぶような形態が整えられていたと考えられるのである。

こうした視点に立った時注目されるのが、湖北地域の中小古墳から4例の甲冑が出土している事実である。湖北グループの中核となる古墳の調査例が存在せず、そうした古墳への甲冑の流入がどのような経路でなされかの問題についての結論は出し得ない。また、こうした甲冑の集中性が湖北地域特有なものとして理解すべきか、ある程度一般化できるものかの議論も必要である。今後に残された課題も多いが、中小古墳を造営した基礎単位の首長層にまで、確実に甲冑が配布される体制が整ってきた証と言うことはできるであろう。

ところで、この地域の甲冑を詳細に見れば、北山古墳出土甲冑は極めて特異な形状・制作技法を示しており、甲冑の制作地の問題点を考える上で注目される存在である。その詳細については省略するが、技術が稚拙で本来の在り方から遠く離れたものとなっており、そのため甲冑としての強度に欠ける点を特徴として指摘することができる。そして、この特徴は、他の定式化した甲冑を模倣したものであり、最新式の技術を次々と採用する中期甲冑の変化の在り方からすれば、全く反するもの言い得るだろう。こうした状況からは、大和王権の中心的な工房において制作されたものではなく、地域的な工房における制作を考えるべきであろうと考えている。さらに、同様の視点で雲雀山2号墳の三角板甲冑を見れば、通常と同型式甲冑のように正三角形の鉄板を組み合わせたものではなく、矩形のものや不整形のものが含まれ、ここにも違和感を覚える。現状では、の2例を知るのみではあるが、甲冑の流通システムとは、必ずしも全てが大和王権からの一元的供給によって成立していたものではなく、在地的な生産もこうした体制を支えていた可能性が浮かび上がる。今後の詳細な分析と類似甲冑の検討を加えて結論を求めてゆきたい。そして、こうした可能性は、地域の単位首長層に配布される甲冑には、地域の中で生産されたものが含まれている可能性を示すといった問題に留まらず、威信財の流通が具体的なモノ単体の配布であった段階から変化し、その生産の技術をも一定限の首長層に配布・あるいは生産を支援することに



よって、その流通ルートをより確実なものとし、その生産性を高めると言った段階に変化しつつある状況を示すものとして注目できる。モノ単体としての貴重性・シンボル性から、モノの持つ生産性や経済性が意識されたのである。この場合、琵琶湖周辺地域においては、高島郡安曇川遺跡群、伊香郡高月遺跡群、栗太郡栗東遺跡群において比較的規模の大きい鍛冶工房の存在が想定でき、そのいずれかが甲冑の生産を行ったものとなる。高月遺跡群の場合は、北山古墳の甲冑を始め中小古墳への甲冑副葬が多く見られた湖北地域に存在し、栗東遺跡群の場合は甲冑分布の中核地に生産地が存在するものとなる。現状ではいずれとも決し難い状況ではあるが、甲冑の副葬が軍事編成などとともに、鉄生産の在り方などを示しているものとも読み取れ、今後こうした視点からの分析も必要になってくるだろう。

③後期古墳の甲冑 後期になれば甲冑の古墳への副葬は激減し、甲冑が威信財としての地位を喪失したものと判断される。琵琶湖地域においても野洲川下流グループと言う極めて政治性を帯びたと考えられる地域の有力古墳から挂甲が2例出土するのみである。まさに、地域支配に関与する武人の姿を彷彿とさせ、甲冑出土古墳の被葬者の姿を示すものと考えておきたい。ただし、少数ではあるが甲冑が制作・流通している事実、すなわち決して甲冑の制作が停止したものではない事実を確認しておきたい。挂甲についても初期の分布傾向から畿内工房で生産された可能性が高いと考えるが、それらが少なからず正しく評価されねばならないだろう。現状では、この製作・流通過程を分析できるだけの資料が得られていないが、甲冑が威信財としての役目を終え主要副葬品から脱落する事実こそ、甲冑管理体制＝軍事体制が成立した証と考えるべきと考える。この体制が、前段階までの生産・流通体制とどのような形態で関係するかなど不明な点も多いが、挂甲の分布状況に馬具などを併せて考える必要が存在するだろう。

④甲冑にみる流通体系の変化 以上、琵琶湖地域の甲冑副葬状況について、時代毎に変遷を概観した。その結果、甲冑については、それを軍事制度と理解するか否かはともかく、中期という時間幅にお

いて一斉に流通体系を整備させるが、後期になれば一気にそれが瓦解するというイメージで語られることが一般であった。しかし、前期における試行錯誤の段階から後期における管理体制の確立へという、一連の変化で捉えることが可能になった。

すなわち前期においては、中国王朝の権威と密接な関係を持った小札冑の流通と、朝鮮半島からの影響で独自に成立した縦板あるいは方形板短甲の流通と言う二重の流通体系が存在した。前者がより限定的な存在で、むしろ特定の人格に付属する特殊な威信財としての流通体系を示すと考えられるに対し、後者はむしろ一般の流通体系的な様相を示しつつ全国的に分布している。この二つの流通体系は相反する、あるいは互いに抵触する関係にあった可能性も考えられる。もちろん、後者が当初から畿内工房で制作されたた可能性が高いが、この段階では、大量生産を前提とした再分配的な流通体系を形成するには到っていなかったのである。

こうした体制の中、後者が、三角板技法を導入し、技術的な定着を背景に大量生産・大量流通を開始する。一方、前者は中国王朝の権威失墜や具体的な甲冑の導入も困難になったであろう点も関連し、その体制は崩壊した。こうして一元的な甲冑流通体系が成立し、本格的再分配構造を採用しつつ分布を驚異的に拡大させるのである。

中期段階の甲冑生産は、次々と最新の技術を導入することによって優位性を確保した畿内工房が主導したものであるとともに、新開1号墳のような流通の中核となる主体が地域に点在させる、明確な再分配構造を備えた強権的かつ安定的な体系であった。さらに、畿内工房以外における地域的な生産遺跡を首肯するならば、単純なモノとしての威信財ではなく、生産という経済活動そのものも再分配されたと評価でき、甲冑を管理するよりもまさに大量生産＝大量流通を指向した体制であったと言うことも可能であろう。こうした体制の中で威信財・身分表出装置としての立場を保持するために、「数量とセット関係」という通常の威信財が権威を表現する側面以外に、「金銅製品」という差別化された製品が生み出された。大和王権の新たな権威表出方式と認識できる。しかしこれとて、地域での生産された可能性

消費の大半が、近畿を中心としている点が理解できる。  
瀬戸内や九州への流通は、畿内からの再分配の可能性が高いだろう。しかし、カジヤ古墳、北谷11号墳、長塚古墳などを媒介にした、畿内を通じない流通も考えられる。



第9図 鍬形石の分布状況

が否定できないのである。

それはともかく後期になれば、甲冑は古墳副葬品の中から急激に消え去れ、こうした強権的・安定的な甲冑流通体系は消滅したかのような状況を示す。あるいは、中期甲冑の流通を推し進めた主体の弱体化、すなわち政権交代などを予想することも不可能ではない。しかし、後期になってもより高度な技術による甲冑（挂甲）は製作され、少なからずが流通する。従って、甲冑の生産・流通そのものを否定するのではなく、その体系が変化したと考えることが必要である。詳細を分析する資料数が存在しなかったが、急激に甲冑が「一般の場」から消滅する背景には、甲冑そのものの管理が開始されたと考えることが妥当かと思われる。大量生産から管理体制への変化が後期の画期であると考えておきたい。

すなわち、甲冑は、一般的流通と特別品・威信財の混在から開始され、これらが一体となった大量生産段階を経た後に、管理されるものに変化したと考えることができたのである。

#### C) その他の副葬品の分析について

次に、時間幅や出土傾向が限定的ながら、特徴的な問題点を表出する副葬品について簡単にコメントしておきたい。

①石製腕飾類（鍬形石を中心に） 石製腕飾類は前期中葉から後半を特徴付ける副葬品である。大和島の山古墳が示すように、大和王権が流通に強く関与した副葬品と考えられ、同時に石川片山津遺跡を中心とする生産遺跡の実態も明らかにされている。琵琶湖地域の古墳では鍬形石が3古墳（安土瓢箪山古墳・雪野山古墳・北谷11号墳）から出土しているのみで、決して十分な出土量とは言えないが、特徴的な問題点を表出している。

第1の問題点は、鏡面や甲冑副葬の状況から安土瓢箪山古墳と雪野山古墳の差異が強調されたが、腕飾類に関しては同系統の製品を副葬しており、両者は同じ地平に位置する古墳と理解できる点である。むしろ、腕飾類の副葬が認められない和迹大塚山古墳の特異性が強調される。この問題に対してのこれ以上の推察は行わないが、雪野山古墳例が腕飾類生産の形成期に該当する一方、安土瓢箪山古墳は腕飾類生産体制の確立後と考えられる年代差は、琵琶湖地域の場合、第2の問題点とも関連し、重要な意味を持つてくる可能性を指摘しておく。

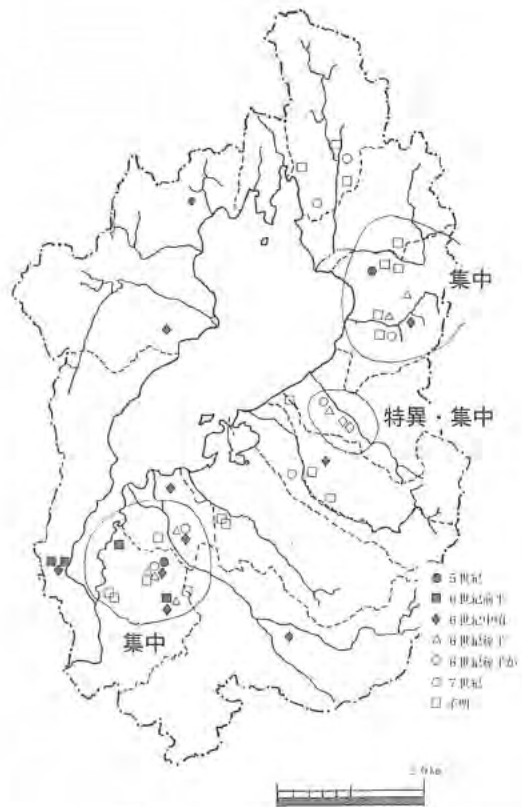
第2の問題点は、北谷11号墳と言う中小円墳から出土している事実である。中小古墳から出土するという現象とともに、未製品とも考えられる製品



と他に類例のない滑石製品を含んでおり、出土鉄形石全体の中においても特異な位置づけがなされている。<sup>24</sup>こうした事実関係に対して、鉄形石の配布に  
 与した被葬者を想定する立場も存在するが、さらにその考えを発展させる現象として高野・辻遺跡群における腕飾類生産が指摘できる。<sup>24</sup>すなわち、高野・辻遺跡においては腕飾類を含む碧玉製品が生産されていた事実が明らかになり、そうした生産と流通に  
 関与した存在として北谷11号墳が指摘できる。ただし、高野・辻遺跡における腕飾類の生産の規模や詳細な年代観は明らかでなく、また、琵琶湖周辺地域で碧玉製品を制作していたとも考えられている鴨田遺跡や物部遺跡との関係など説明されるべき課題が多い点は明記しておきたい。

さて、栗東遺跡群の中で腕飾類が生産され、それが古墳の副葬品の中に反映しているとの前提に立てば、石劔が集落遺跡を含めて湖南地域から多く出土している事実に関しても説得力を持つもので、湖南地域が、碧玉製品の生産と流通の核となっていた蓋然性は高いものと言えらるだろう。そして、こうした可能性が雪野山古墳と安土瓢箪山古墳、さらに和辻大塚山古墳との共通性や差異性に関係しているであろう点は言うまでもない。琵琶湖地域における腕飾類の出土傾向には、栗東遺跡群での生産が反映している可能性、言い換えれば、琵琶湖が北陸（主生産地）と畿内（主集積地）との結節点であるとともに、自らも生産を行う場としての関係性を反映している可能性も考慮されねばならないのである。なお、北谷11号墳と類似する鉄形石の在り方を示す古墳として丹後カジャ古墳が指摘できる。また、美濃長塚古墳もその候補となる。いずれの古墳も鉄形石の主生産地たる北陸南部から各地に向うルートの基点に位置している。大和王権の強い関与の流通とともに、独自の流通ルートが機能していた可能性を示すものとして注目しておきたい。

②馬具類 現在琵琶湖地域では51古墳から馬具が出土しており、新開1号墳が中期に該当する以外は全て後期古墳からの出土である。また、後期に該当する馬具を見れば、所謂装飾系の馬具は山津照神社古墳などの有力古墳から出土しているが、大半は素環轡などの実用馬具が単体的に出土しているのが



第10図 馬具出土古墳分布図

現状である。こうした状況からすれば、琵琶湖地域における馬具副葬の習俗は通常の場合と大きく逸脱するものではなく、特に問題点が存在しないと言うのが現状である。しかし、出土状況を詳細に見れば、幾つの特徴ある地域を指摘することができる。

湖南地域では、北谷古墳群と和田古墳群とにいて高い確率で馬具が出土し、際立った特徴となっている。通常の後期古墳群と比較して社会的優位に立つ被葬者層の存在も考えられるが、乗馬風習が一般化している地域の状況を想定する必要性が存在する。さらに、付近の高野遺跡群においては馬具の生産（鍛冶）を行っている可能性も指摘でき、そうした関係が反映している可能性も考えられる。すなわち、この地域においては生産と消費と言う両面から、馬具との緊密性を考えることが可能となるだろう。

甲良町を中心とする犬上川流域においては、土坑墓や木棺墓と言う通常は階層的下位に位置づけられる墓制から実用馬具が多く出土している。併せて、馬具の出土率も高いと認識できる。こうした事実に対して渡来系集団と結びついた習俗を想定する方法も存在し、馬具以外からの状況も渡来系集団の存在

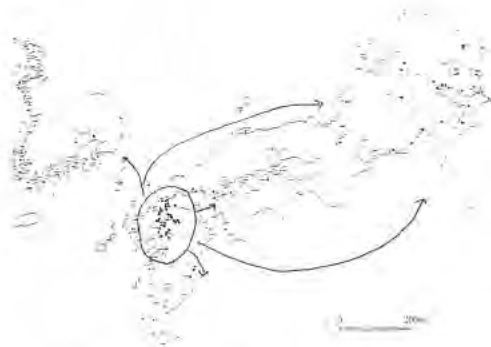
が伺える。また、土地条件から「牧」としての開発の可能性も考えられ、いずれにしろ、乗馬の風習との密接な関係が想定される地域である。

湖北地域、特に坂田郡においても馬具の出土率がやや高いと感じられる。数量的には限られているが、古墳全体の数量が少ない地域にあっても、一定数の馬具が存在する事実は注目に値するだろう。

一方、大津北郊地域では馬具の出土率が極めて低い点も特徴として指摘できる。3古墳から出土している馬具についても、2古墳が装飾系馬具であり、実用馬具と言う視点に立てば、乗馬の風習がほとんど定着していない地域とも言い得るだろう。これは、被葬者集団が特殊に組織化された渡来系氏族である事実との関係も考える必要があるだろう。

このように馬具の出土状況を見れば、生産地との関係も考えられる湖南地域を含めて、必要とする地域に一定数の馬具（実用馬具）が流通していると認識することが可能となる。すなわち、「牧」の経営や特殊な習俗の関係から馬具を必要とする地域には多くの馬具が流通し、一方、鉄釘の集中的出土状況から確実に鉄製品の流通圏に位置する大津北郊地域においては、必要の無いためかほとんど馬具は流通していない。これは、特殊な性格を帯びた集団が各地に配置されていったという当時の政治的動向を反映したものとも理解できるが、そうした集団に対して必要な量の馬具を確実に流通させるという体制が存在してこそ可能になる。実用馬具が強く管理された遺物で、特定の集団と密接に関係して流通したと考えれば、こうした政治的動向も理解できるが、数量的にも実用品と言う性格からも、こうした体制を考えることは現実的ではないと考える。むしろ、必要とするところには確実に流通すると言う体制を考える方が無難であろう。言い換えれば、実用馬具はまさに生産と消費と言う現象によって流通していると言うことができるのである。

こうした馬具の生産と流通の関係を具体的に示すものとして貝製馬具が指摘できる。同製馬具は現在189例が集成されているが、その分布状況は大半が北部九州に集中し、北部九州と文化的共通性の高い関東北部がこれに次いでいる。その他例外的に朝鮮半島南部、瀬戸内海地域、丹後・越前・加賀地域、



第11図 イモガイ馬具の分布図  
(29)文献より (一部改)

北信濃地域に分布し、琵琶湖地域においても湖南の和田古墳群から出土している。南海産貝類全体の分析から畿内政権による関与を考える説も存在するが、単純に分布状況を見る限りにおいては、北部九州で制作され、周辺地域で流通するとともに文化的に交流の深い関東北部にも多く流通した。その他、青海（日本海）や瀬戸内の水域を媒介に流通したと考えられよう。すなわち、沖縄や奄美諸島との交易を通じて入手した南海産貝類を利用した、おそらく一定の地域的ステイタスシンボルとしての貝製馬具を、北部九州のいずれかの工房で製作し、地域内へ流通させるとともに、一定数は北部九州の「特産品」として長距離の交易品とされたものと認識できる。馬具類がまさに流通経済の関係によって分布している状況を示すものと言い得るだろう。和田古墳群におけるイモガイ製馬具の存在は、琵琶湖から青海（日本海）を経て九州に通じる流通経済網の存在を示しているのである。

もっとも、馬具類における優品や大量生産品が畿内工房で製作された可能性は否定されるべきものではないが、実用品としての木目の細かい流通をみれば、地域での生産も同等に評価する必要が存在する。少なくとも、畿内工房が唯一の工房で、そこから威信財的に馬具が配布・流通していたのならば、藤ノ木古墳など優秀な渡来馬具の存在こそ、説明できないのではないだろうか。馬具という如何に飾り付けようとも実用品としてのみ意味を持つ製品であるがゆえに、経済的な流通体系で分布したと考える。そして、琵琶湖地域内においても、湖南・高野遺跡群





畿内のほか、福井・瀬戸内東部・九州に分布が集中する。  
搬入品が多く含まれており、生産地と購入窓口の性格が想定できる。



第12図 主要金銅製品出土古墳分布図

において生産の可能性が指摘されているとともに、北部九州などとの長距離交流を行い、全体としての生産性を向上させて行ったのである。

③金銅製冠帽 琵琶湖地域においては金銅製冠帽の出土は、鴨稻荷山古墳と山津照神社古墳で確認

されているに過ぎない。しかも、山津照神社古墳の場合は正確な発掘調査による資料ではなく、冠帽以外の装身具のセット関係等不明な点が多い。一方、鴨稻荷山古墳の場合は、文字どおり頭から足先まで金銅製の装身具で飾られた被葬者の姿が明らかにさ

れ、しかも、それらはまさにセット関係として、一括した生産も考えられている<sup>30</sup>。こうした鴨稻荷山古墳出土の冠帽は広帯二山式であり、同型式は畿内を中心とした分布を示し、装身具のセットが畿内工房で製作された可能性を示している。さらに山津照神社古墳出土冠帽も同型式に復元でき、冠帽に関しての琵琶湖地域は、畿内からの流通圏に位置したものと理解できるのである。

こうした金銅製装身具類を葬具と見るか日用品と見るか議論が必要となるところではあるが、大和藤ノ木古墳の状況からも明らかのように、これらは大和王権を中心として形成された「礼装」と関係するであろう事実は、金銅製飾履が畿内中心に分布する事実からも確認できる。従って広帯二山式冠帽の分布を含めて、その流通には大和王権が何らかの規制を加えた可能性が考えられる。セット関係をなす古墳が極めて限定的であり、かつ、イデオロギー性の強い遺物である点を加味すれば、まさに特定の被葬者を選定して、与えたものと考えることができそうである。あるいは、金銅製甲冑の分布・流通状況と共通する状況とも理解できるだろう。

ただし、冠帽の全てが畿内工房で製作されたものではないであろう点も確認しておきたい。すなわち、『二例しか出土していないが額帯式は朝鮮半島を含めた青海（日本海）地域で、細帯式は北部九州あるいは関東で、それぞれが製作された。』分布状況や系譜関係を加味すれば、こうした結論を導くことも不可能でもないだろう。この視点からすれば、冠帽に関する畿内工房も、大規模かつ最新のな地域生産の一つにすぎず、その製品の全ての流通が、大和王権の政治的な意図に基づくものではなかった可能性も窺われる。むしろ、飾履など一体となった時のみ、特殊な流通が形成されたと考えておきたい。

それはともかく、地域的な生産流通と畿内工房を核とする生産流通とがどのような関係にあったかは明らかでない。しかし、金銅製品、装身具という視点に立てば、耳環は極めて広範囲・濃密に分布しており、その分布状況を考えれば、地域的な金銅製品の流通体系がまさに末端まで完備されていたと判断することができそうである。この問題は馬具を含めた金銅製品全てを含めて考える必要が存在する。

馬具については既に述べたとおり、複数の製作地が存在し、その所在する地域内の流通とともに長距離交易として流通していた可能性を考えた。金銅製甲冑においてもその可能性は否定できなかった。今、冠帽についても、畿内工房の特殊な在り方を認めつつも、複数の生産地の可能性が窺え、今回分析はしなかったが、垂下飾付耳環についても複数の生産流通体系を考えた方がよさそうである。すなわち金銅製品は、どの段階から日本列島内における生産が確立したかの問題も解決されねばならないが、6世紀段階には主要地域に生産地が存在し、地域毎の流通圏を形成し、さらに長距離におよぶ交易を行うという体制が一般的であったと言ふべきではないだろうか。これが前提となって耳飾の細かい流通が可能になったのである。三角縁神獸鏡や中期甲冑などがモノそのものが単体で威信財として成立し、「一元的」な流通体系で地域に広がっていった段階から脱却し、地域毎の生産・流通を基本とし、さらに一部に長距離交易を行うという経済体系を生出しながら、その中で特殊な位置付けが与えられた製品のみが、威信財・あるいは身分表出装置として成り立ったのである。この意味から冠帽を中心とする金銅製品は、まさに古墳時代後期を代表する副葬品と言ふことができるであろう。

### 3. 琵琶湖およびその周辺地域

以上、前方後円墳の在り方と幾つかの副葬品の在り方について分析を加えてきた。最後にこれらを総括して、古墳時代における琵琶湖の位置と、古墳時代におけるシステムがどのような形成過程を持っているかについてまとめておきたい。

#### A) 副葬品変化から見た古墳時代像

まず、副葬品から見た古墳時代の流通体系の変化を整理する。今回は議論の対象とはしなかったが、弥生時代を通じての日本列島は東アジア世界の中で、流通経済システムを整備・発展させていたであろう事実が前提として存在する。列島における水田農耕の開始もその視点から整理する必要も感じているが、鉄や銅などの金属原料・製品の入手をはじめ、青海（日本海）を介した玉類や南海産貝類などの流通が、前期もしくは中期の初頭から活発に行われている事



実がこれを示している。また、こうした流通経済システムは、列島内の幾つかのブロックが核となっていたであろう事実も、最近の出雲や丹後における調査成果が示している。そうしたブロックは東アジア交易の拠点としてのみならず、自らも何らかの生産活動を行い、列島内で一定のポジションを獲得していたのである。こうした弥生時代像については、改めて論を起すつもりである。

さて、古墳時代開始直前においてもそうした流通経済システムが機能し、日本列島を覆っていたであろう事実は、三角縁神獣鏡以前における急激な鏡面流通の活性化が示している。そして、方形板短甲の分布状況や、古墳時代になってからも鏡面が連続的に導入されている事実からすれば、こうした流通経済システムは古墳時代以降も機能していたであろう事実が確認される。また、鏡面の入手経路や甲冑の技術系譜を考えれば、この流通経済システムは東アジアに広げられていたものであり、また複数のチャンネルを保有していたものと評価できる。いずれにしろ、古墳時代前期とは弥生時代以来の流通経済システムに負うところの大きい社会構造であったと言えることができるであろう。

一方、この従来の流通経済システムと全く異なる流通経済システムも、古墳時代前期には急激に整備されていった。三角縁神獣鏡の「配布行為」であり、小札冑や定式銅鏃の流通にもその可能性が考えられる。これらは、明確な再分配構造を指向した流通体系を示している。その意味からすれば、それらが「モノ単体」として内包している中国王朝の権威性ととともに、流通体系そのものも中国王朝的な体制を模倣・指向した動向と評価することが求められるかもしれない。三角縁神獣鏡の分布の確認できる日本列島の多くの地域が、中国王朝の朝貢体制に対応したシステムを模索したのである。この意味から、この流通体系も東アジアの中で機能していたと評価されねばならない。

いずれにしろ、この再分配構造に基づく流通経済システムと従来からの流通経済システムとは、前者がより政治的な側面を内包している事実からも、当初は重層的に形成された側面が伺える。安土瓢箪山古墳や丹後蛭子山古墳の存在は、後者の流通経済シ

ステムに多く立脚していても、大型の前方後円墳が造営される事実を示している。しかし、後者の拡大や、その基礎となった中国王朝の権威の失墜などを契機に、両者は明らかに抵触するようになり、後者から前者への関与や一体化などが進められる。これが前期後半からの動向である。

こうした関与の最初が、鏡面や甲冑における畿内工場の成立である。しかし、両者のたどった道のりは全く違ったものであった。鏡面は、漢式鏡を模倣した初期の大型優品については再分配構造を指向した状況が見出せるが、小型鏡ではむしろ従来の流通体系の中に製品を大量に送り込む形態が考えられた。形式的には、大半の鏡面が畿内工産と考えられ、分布の密度も畿内を中心としているのである。しかしその一方では、5・6世紀を通じて一定量の舶載鏡が地域に点在し、それらを流通における核と考えることも不可能ではない。すなわち、従来の流通体系の中に畿内工場として参与し、その結果として鏡面流通の大部分を独占したと表現することも可能だろう。言い換えれば、従来の流通システムの中に畿内工場と言う中心地を形成したのである。

一方、甲冑は最新の技術とおそらく鉄素材そのものも独占を媒介に、より強固な再分配構造を生み出し、さらに一部で地域毎の生産を展開していた可能性が伺えた。地域での生産についても、技術系譜は畿内工場に連動している状況からすれば、まさに技術系譜を含めた再分配構造を通じての独占と表現することが可能だろう。こうした甲冑群形式の基本に位置する方形板短甲は、従来の・在地的な流通体系に位置していた可能性も考えられたが、この系譜を引き継ぎつつも、畿内工場という全く新しい体制を形成したと言う側面こそ重要であろう。

こうした2者の方向性の中間に位置するものが碧玉製品である。従来からの生産・流通システムを再編する形態で生産に関与し、製品の大部分を再分配構造によって流通させている。同時に、祖形となる南海産貝類の流通にも関与していた可能性も想定できる。しかしその一方では、大和王権を経由しない流通も一定範囲で行われていた可能性も高く、ここに従来の生産・流通システムと再分配構造が結合するプロセスを見出すことができるのである。これ

を玉類全体の問題に昇華すれば、その経済性は決して無視できない、大きな存在であったと理解できるだろう。

このように前期後半から中期の動向を整理すれば、従来の流通体系の中に畿内工房と言う情報と技術を独占的に確保した生産地を生出すことによって、流通の中に参画するとともに、その一部、あるいは大部分を再分配構造として再編成する形態が確認できた。もちろんこれによって従来の流通システムは大きな変貌を余儀なくされた点も言うまでもない。さらに、その体制をより効率的に推し進める意味での地域での生産・流通活動を開始させた可能性も窺えた。もっとも、地域での生産も畿内工房と一連の変化・動向を示す点から、工人交流や中央出仕制度などの政治的な関係が締結され、地域での生産・流通に対する規制が加えられていた側面は否定できない。しかし結果として、地域での生産力が向上し、流通を通じて地域の経済圏が発展・成長したであろう点を過小に評価することはできないのである。今回は分析の対象とはしなかったが、中期から後期にかけての須恵器生産の展開が、まさに経済活動として成立してくる状況は参考になるだろう。

後期になれば、こうした体制がより確立されたものとなってくる。馬具や金銅製装身具類に見られたように、地域毎の生産流通圏は一層活発になり、「特産品」的製品を指摘することも可能となった。また、こうした地域での生産流通の活性化が前提となって鉄製農工具の改良・普及などがもたらされ、地域の経済発展が著しく成長したであろう点も予想される。ただし、依然として畿内工房が中心に存在し、技術系譜や原材料などを媒介に地域の生産活動に一定の関与を行ったであろう点は否定できない。あくまで、畿内工房を頂点とする体制は維持されていたと考えるべきで、その体制の中でこそ地域の生産流通活動は活性化を実現したのである。ただし、畿内工房自体についても、威信財を製作し特殊な再分配構造で製品を流通させることではなく、むしろ流通経済システムにおける一大生産地としての機能が重視され、それを確立させていったと考えられる。中期甲冑のような流通体系はもはや成立しないのである。特別な意味が付与された製品のみが、威信財

あるいは身分表出装置として再分配構造の流通体系を維持した程度であろう。いずれにしろ、こうした状況は商品経済に近づいた経済思想の萌芽とも評価でき、畿内工房を頂点とする新しい生産流通システムはここに完成したのである。

ところで後期になれば、倭政権の一員として対外交渉や列島内交渉に参加したであろう首長層が地域認められるようになる。野洲甲山古墳や綿貫観音山古墳、やや先行するが江田船山古墳などがその代表例として指摘される。その政治性を除外して考えれば、彼らは東アジア世界での情報や物資を直接的に地域に伝える主体と評価できる。この段階になって地域における長距離交易は再び活発になり、新たな交易の核が形成されたと認識できた。しかし、こうした動向は前者の畿内工房を頂点とする流通システムの動向と相反する、あるいは無関係なものではなく、むしろ前者を前提とした動向である点を正しく評価する必要がある。前者によって地域の生産力が向上し、新たな流通体系が整備された事実を前提として、地域間の交流が活発になったものであり、その延長線上に朝鮮半島など東アジア世界が広がっているのである。従来からのネットワークシステムが単純に再生したものではない。言うなれば、前者を前提とした新たなネットワークが完成し、それが機能を開始した姿と理解できるだろう。

このように古墳時代とは、弥生時代を通じて東アジア社会の中で張り巡らされていった流通経済システム、おそらくこれは中国漢王朝が管理した「南海交易」の末端であり、あるいは「百越の民」の活動の末端に該当すると考えるが、本格的に朝貢体制に組み込まれたことを契機にそのシステムが一元化し、より生産性を高めた体制へと変化していく過程と評価できるだろう。具体的には畿内工房を核とした生産性の拡充と、それを基礎とした流通ネットワークの再編成という形態で進化した。これが自給体制の確立を目指したものであった点は、中期甲冑に顕著に表現されている絶え間ない最新技術の導入や、須恵器・金工・製鉄などの生産がこの段階になって本格的に試みられる点からも首肯され、これを一定レベルで達成した事実も説明の必要はないだろう。

ここで古墳時代の面白さは、日本列島の大部分が



本格的な朝貢体制に組み込まれた時、東アジア世界は「胡漢複合」<sup>132</sup>がまさに進行した時代にあたり、中国王朝の権威を含めた東アジア世界における政治・経済のシステムが大きく変貌しつつある状況に置かれていた事実である。これは偶然ではなく必然と理解しているが、現在の力量ではこれを十分に説明することはできない。しかし、日本列島の変化は東アジアの変化に即応したものである事実は指摘できる。日本列島における、より管理的な流通体制や自給化への動向が、東アジア世界での孤立化に向ものではなく、むしろ、その体制がほぼ確立した後期段階には、対外交渉がより活発になった。これには朝鮮半島の動乱など事件史からの直接的影響も存在するが、日本列島における「生産・流通革命」が東アジアの動向に即応、一体となったものとして緩やかに達成された事実を示している。この意味から日本列島の古墳時代も確実に「胡漢複合」の真っ只中に位置していたと表現できるだろう。

#### B) 前方後円墳の変遷と琵琶湖の意味

こうした古墳時代の評価を前提として、琵琶湖周辺における前方後円墳の動向を再度見てみれば、時代に変化に即応して、琵琶湖もその意味を明確に変化させている事実が看破できる。

前期段階の琵琶湖地域は、従来からのネットワークシステムが強固に作用した世界であった。琵琶湖に求心力を求めた前方後円墳が、琵琶湖の水運を意識して造営され、その被葬者層はネットワークシステムを維持した主体であったと考えることも可能であった。湖南と湖北における前方後円墳の構造的な造営方式は、システムネットワークとしての強固な連動性を想定させ、安土瓢箪山古墳と膳所茶臼山古墳の存在は、そのシステムネットワークが琵琶湖そのものを支配していた事実を示していた。これは特に「畿内—琵琶湖—北陸南部」を強調したネットワークであったが、キ鳳鏡などの分布状況を評価すれば、畿内と言う表現は「瀬戸内東部」と言い換えることこそ適切かもしれない。また、この段階では「畿内（他の言葉に置き換えても良いが）」と言う地域概念も成立していなかった可能性も考えられるだろう。

一方、再分配構造による流通システムも琵琶湖地

域に確実にその影響圏を拡大させてきた。地形的に琵琶湖のネットワークとの関係が弱いとも考えられる湖東の首長層に対して再分配構造による権威を付与し、あるいは湖南の基礎地域の首長層にも一定の関与を示した。こうした動向が伊勢湾を中心とする東海地域を意識していたであろう事実は三角縁神獣鏡の分布状況からも指摘されるところであり、明らかに従来のネットワークとは異なる方向性を指向していたのである。古墳の調査例が少なく具体像は語れないが、従来形の流通体系と再分配構造とが重層的に、しかし後者が前者の中に入り込んでいく動向が読み取れるであろう。

中期段階になれば、従来形のネットワークシステムが畿内工場の流通体系という側面を帯びるとともに、強固に完成された再分配構造が巡らされるようになる。言い換えれば、畿内工場を核とした新しいネットワークが本格的に機能を発揮したのである。これに伴い琵琶湖の持つ求心性が薄れ、ネットワークシステムを支えた個々の存在が、自らの位置を表現するかのような形で前方後円墳が造営された。これは琵琶湖と言う内向きの存在よりも外部社会との結びつきを強調するという方向で具現化し、従来のネットワークシステムに代る新しい全方位的な流通システムに即応したものであった。さらに、こうした動向に合わせて流通経済の核となる地域が形成された。琵琶湖地域の場合は、前期段階から有力な地域として琵琶湖周辺をリードしてきた湖南地域が、そのまま新しい生産・流通システムの核となり有力な古墳を歴代適に造営する。新しいネットワークシステムが従来からのネットワークシステムを取り込む具体的な現われとして評価できるとともに、新しいネットワークシステムも琵琶湖という存在を必要としたものと言えるだろう。さらにこの段階では、明確な前方後円墳は限定的で帆立貝形古墳など規制され古墳が多く営まれているが、これは新しいネットワークシステムの推進が強権的な規制力を伴うものであった事実を示している。新しいネットワークシステムの形成が、一面では政治的な動向でもあった可能性を示しているのである。ただし、集落遺跡の動向から湖南地域に次ぐ流通・経済の核とも考えられる高島地域は有力な古墳は少なく、ある

いは山を越えて近接する若狭地域の古墳群との関係も考慮する必要も考えられた。この段階の古墳造営の複雑さの一端を示しており、古墳の動向と政治的な動向がどのように連関するのか、今少し分析方法を検討したい今後の課題である。

後期になっても、基本的な古墳造営の方式は中期からの動向を踏襲する。その中で再び琵琶湖を意識した古墳が強調される。琵琶湖をめぐるネットワークシステムの安定化が計られたと言える。しかし、琵琶湖地域として、琵琶湖を媒介としたネットワークシステムを単一の突出した前方後円墳によって表現するという体制ではなかった。複数の同規模の古墳が「連動して」ネットワークを支えるという体制であった。ただし、その中心に大岩山グループが存在し、中期に認められた湖南地域の優位性、流通経済の核としての性格がより明確な形で表現された。この意味からは「湖南」が主導する形でのネットワークの完成とも理解できるだろう。

さらに、大岩山グループの甲山古墳は朝鮮半島を含めた長距離交易の媒介者であるという性格を副葬品や棺構造によって表現している。ネットワークシステムが広く東アジアに開かれたものであるとともに、その中核に位置する主体の独自性を表現していると言えるだろう。一方、そのネットワークシステムの重要な構成員たる鴨稻荷山古墳では、棺構造や副葬品はむしろ大和王権との強い関係性を表現しており、独自色の弱いものとも理解できる。継体王朝の成立と言う事件史的背景など複雑な政治構造を示している可能性も否定しないが、新しいネットワークシステムが、地域の独自性や東アジアに開かれた側面とともに、大和王権が強力に規制した側面との、相反する二つの性格の上に成立している事実を如実に示す事例としておきたい。そして、そうした<sup>(34)</sup>2面性の上に、馬具生産の可能性や滑石製玉造り、鏡山の須恵器生産などの地域工房群が湖南を中心として成立する。原材料や技術系譜などの側面においてこれら工房群の具体的経営が畿内工房に負うところが大きい点は言うまでもない。いずれにしろ、こうした相反する性格を示す古墳を媒介として、琵琶湖から東アジア世界へ、開かれた生産・流通と管理された生産・流通を広げていったのである。畿内工房=

大和王権を中心としたネットワークシステムは、ここに完成したと言えるだろう。

### C) 古墳時代単位としての琵琶湖地域

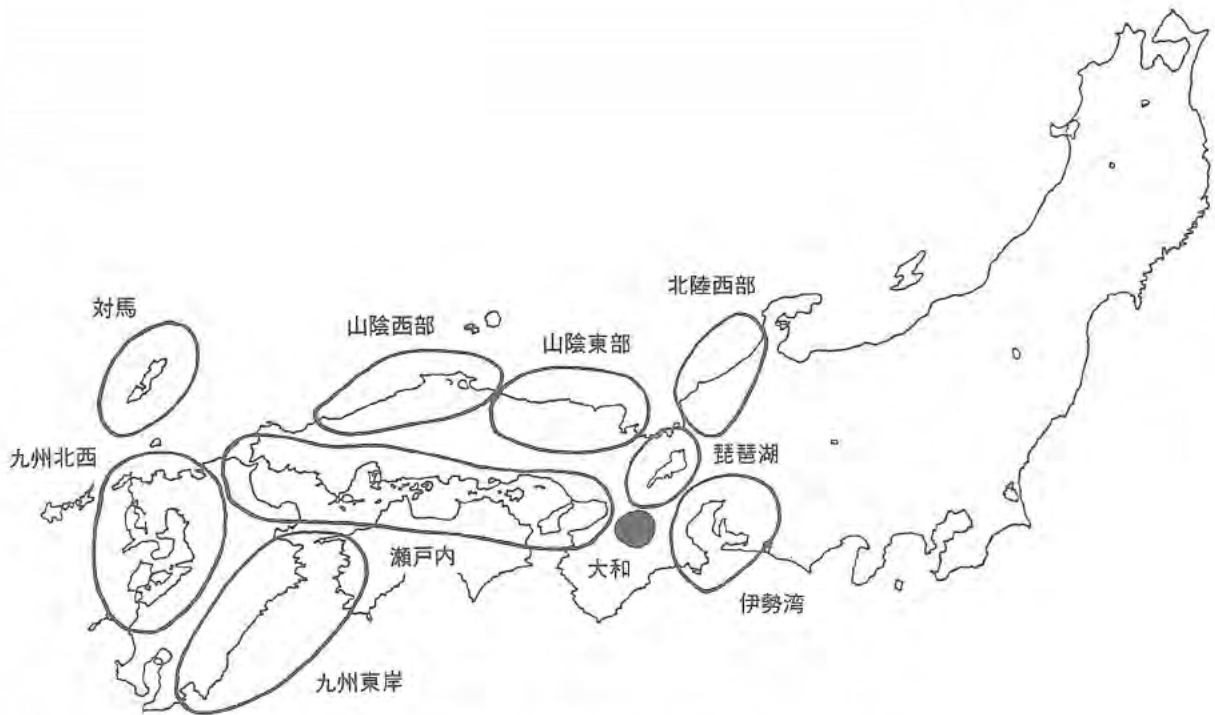
このように、流通体系の変化と古墳の在り方をリンクさせて考えれば、古墳時代における琵琶湖の意味は自ずと明らかになってくる。すなわち、古くから指摘されている点ではあるが「日本海・東海・瀬戸内そして畿内を結びつける地点・ルートとしての性格」である。弥生時代以来、琵琶湖地域はまさにそうした性格ゆえに、列島内で重要なポジションを占めてきた点は言うまでもない。すなわち、ネットワークシステムにおける琵琶湖地域の位置は相当に重視されたものであったと考えられる。古墳時代以前に琵琶湖地域が重要な地位に位置していたであろう状況は、極めて活発に行われる原産地以外での玉造りが如実に示している。

さて、古墳時代の琵琶湖地域は、そうした性格が顕著に表出し、その性格が古墳の動向を規定している事実は本文で述べたとおりである。琵琶湖なしには、この地域の歴史は理解できないのである。前期では瀬戸内東部地域と北陸南部地域とを結ぶ性格が伝統的・在地的側面として強調される一方、伊勢湾地域を意識した形での新しいネットワークシステムの形成が、言わば重層化して確認できた。中期にはこの二つのネットワークが融合する形で全方位的な関係が強調され、後期になれば、それがよりシステム化したもの整備された。その変化は連続的であるとともに、琵琶湖をめぐる葛藤と表現することもできるだろう。

ところで、今回の考察では扱えなかったが、琵琶湖地域は事件史の舞台でもある点は言うまでもない。継体王朝の成立や冊封体制への参加などに代表される日本史的な事件とともに、日常的な変化としての事件史の積み重ねとして琵琶湖の歴史は存在する。特に、渡来人の居住という事件は、琵琶湖に大きな意味をもたらした事件として評価しており、いつかは解明したい問題と思っている。

それはともかく、今回見たような歴史変化は古墳時代を通じて緩やかに進行したものであり、事件史とは異なる時間の流れを表現していると言えるだろう。その変化が倭五王や豊与などの事件を契機とし





第13図 現時点で想定している西日本の地域単位

て発生したものとしても、それが点として存在するのではなく、それを契機とした変革が緩やかに琵琶湖周辺の人々の中に浸透してゆくと理解できる。今回の考察によって、緩やかな変化は明らかにできたつもりである。東アジアという枠の中で、流通・経済の在り方を確実に変化させ、それに対応して古墳という墓制を営んだ、その具体像を明らかにし得たと考えている。そして、この緩やかな変化こそが、あるいは地域の個性と表現することも可能かもしれない。地域の個性の抽出こそ、その地域が歴史単位として成立するための、絶対必要な条件と考える。そして、個性を支える基層に「琵琶湖としての性格」が大きく横たわっている構造が明らかになったのである。あるいはその性格は帰属性と表現できるかもしれない。いずれにしろ、緩やかな歴史変化の基層には「琵琶湖としての性格」が脈々と生きついているのである。まさに、琵琶湖は一つの歴史単位として成立する条件を備えているのである。

さらに、今回は意図的に述べなかったが、古墳時代を通じた緩やかな変化が、幾つかの主体の競合と共生の結果生じたものである点も確実である。単独の主体が琵琶湖の全てを決定したものではなく、湖南・湖北・湖東・湖西など、あるいは更に小規模な

基礎単位などが競合・共生することによって、琵琶湖としての性格を決定し、その競合・共生のスタイルを変化させることに、緩やかな変化を生み出していたのである。これは事件史としての歴史事象が変化への基点となっている点是否定しないが、むしろその事件を契機に、競合・共生のスタイルを変化させたプロセスこそ評価しなければならないのである。そういう意味からは古墳時代には劇的な変化は存在しないのかもしれない。あくまで、緩やかに、しかし、確実に変化するのである。前方後円墳の変化や副葬品の変化はまさに、まさにそうした緩やかな変化であった点は理解いただけたであろう。

歴史を取り巻く三つの時間の流れと、その中での競合と共生、そして琵琶湖という帰属意識の根元、琵琶湖地域は古墳時代を考えるための基礎的単位として、まさに実存すると言うことができるのである。

#### 4. 新しい古墳時代像を求めて(おわりに)

以上、長々と説明不足の駄文をならべてきたが、ここまで来て、やっと筆者は安心している。これは琵琶湖と言う水域が歴史単位と有効性を持ち得る点がおぼろげながら説明できたからである。湖と言う水域も明らかに歴史の単位として成立するのである。

ところで、ここまで書き上げて、古墳時代に対して、幾つかの従来とは異なるイメージを持つに至った。

最後にそのイメージを羅列しておわりにしたい。

第1は、弥生時代・古墳時代は農耕社会ではないというイメージである。もちろん、農耕が基層に存在し、共同体や親族関係を決定して行った過程は正しく評価する必要が存在するが、それ以上に東アジア世界の中で人々の交流は驚く程活発で、その交流が歴史を動かす原動力となっている事実である。

「世界＝経済」(エコノミー・モンド)と言う概念で日本列島を東アジア世界の中に位置付ける必要が存在するのである。

第2点目は、第1のイメージを具体化するためには、従来からの視点による古墳時代の分析ではなく、琵琶湖地域と同様の視点で、列島内に「実存地域」を証明し、その地域相互の関係を解明する作業が必要という点である。具体的には、瀬戸内地域・九州北西地域・山陰南部地域・山陰北部地域・北陸南部地域・伊勢湾地域などを考えているがいずれも証明は今後の課題である。特に、関東甲信越地域から東北地域については筆者の不勉強から、地域のイメージする形成できていない。いずれにしろ、『これらを基礎単位として、それらの複合としての「日本列島」における「経済＝世界」概念の構築こそが歴史の目的』とするならば、今回の作業は、前提のための前提に過ぎない。さらにそれを東アジア・アジアへ展開する作業こそ必要とされているのかもしれない。ところで、実のところ大和盆地が実存地域として成立するか、「畿内」の成立と併せて最も重要で、一番評価の難しい最終問題である点を付記しておく。

第3のイメージは、世界史レベルでの時代区分の問題である。古墳時代の変化は、東アジア世界の中で評価すべき点は何度も述べたが、これは「胡漢複合」と呼ばれる古代から中世にかけての一大変化に即応したものであった。これは大和王権の成長や朝鮮半島の混乱・中国王朝の権威失墜という文脈では決して理解できない、世界史の大きな流れの変化を日本列島的に体験したものと理解している。そしてこの「胡漢複合」は古代から中世への変節期と理解されている。しかし、私の常識が正しければ「日本列島はいまだ古代にも至れず」である。日本列島の

変化が東アジアの変化に即応したものであるのなら、この変化を古代から中世への変化、すなわち弥生時代を古代、奈良時代を中世と理解する柔軟性も必要になってくるのだろう。

これらが、今回の論考を通じての私のイメージであり、これからはこの視点について、一つづつ具体的な事例を検索しつつ問題を解決しようと思っている。今回は、筆者なりの文字どおりのイメージを提出したもので、前提のための前提作業に過ぎないのである。少なくとも、考古学という世界においては、吉備や筑紫・大和といった操作概念の地域単位による政権争いや政権交代は要らないと思っている。その試行錯誤の一步ではある。

いずれにしろ、これからの作業は今まで考えてもいなかった古墳時代像を求める作業になると思っている。あるいは、考古学・歴史学にとらわれない新しい時間軸に対する知の枠組みを求める作業かもしれない。ガリラヤ湖畔に佇んで「小さい」とイメージしたところからの知の道行きは思わぬところに迷い込んだようである。

#### 注

- (1) フェルナン・ブローデル『地中海』(浜名優美訳)藤原書店 1995
- (2) 川勝平太編『海から見た歴史』藤原書店 1996
- (3) 細川修平「二つの前方後円墳」『紀要』第5号(財滋賀県文化財保護協会 1993)
- (4) 古保利古墳群については、黒坂秀樹『古保利古墳群詳細分布調査報告書』(高月町教育委員会 1995)に詳しく内容が分析され、歴史的評価が加えられている。今回の分析も同書に負うところが大きい。個別古墳に関する解釈から歴史解釈への視座の差異などが、筆者との間には少なからず存在する。ここでは、紙面の都合から筆者の見解のみを述べ、黒坂氏への失礼が存在する点をご容赦いただきたい。
- (5) これらの古墳の規模・墳形には各種の理解が存在する。
- (6) 福永信哉「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 1996
- (7) 細川修平「古式小古墳群素描」『史想』21号 京都教育大学考古学研究会 1987
- (8) 細川修平「5世紀の琵琶湖周辺」『滋賀考古』16号 1997
- (9) 7と同じ
- (10) 林之越古墳を地域を越えた視点から分析した論考に、近



藤広「古墳の計画的配置と首長権の移動」(『滋賀考古』18号1998)が存在する。しかし、古墳そのものの年代観には、筆者との間に大きな差が存在している。筆者は、埴輪を実見した結果、6世紀前半から中葉の年代観を考えた。いずれにしても、林之越古墳の正確な報告書が提示されていない現状での、これ以上のコメントは差し控えるものとしておきたい。

- (11) 細川修平「古墳時代後期における琵琶湖の水運」『物と人』滋賀県立安土城考古博物館1997
- (12) 高谷好一『〈世界単位〉から世界を見る』京都大学学術出版会 1996
- (13) 田中勝弘「滋賀県」『国立歴史民俗博物館 研究報告』
- (14) 盤竜鏡については、画文帯神獸鏡とともに、特別な意味が付与された鏡であると考えているが、詳細は後日とする。
- (15) 森下章司「古墳時代ホウ製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6 1991
- (16) 森下章司「古墳時代の鏡」『倭人と鏡』第36回埋蔵文化財研究集会 1994
- (17) 松木武彦「前期古墳副葬鉄群の成立過程と構成」『雪野山古墳の研究』1996
- (18) 花田勝広「甲山古墳の発見と獣帯鏡」『まほろば』歴史民族資料館だより 107 野洲町立歴史民俗資料館 1997
- (19) 橋本達也「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 1996
- (20) 高橋克寿「4世紀における短甲の変化」『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館 1993
- (21) 藤田和尊「古墳時代における武器・武具の保有形態の変遷」『檀原考古学研究所論集』8 1988
- (22) 橋本達也「古墳時代中期における金工技術の変革とその意義」『考古学雑誌』80-4 1995
- (23) 北條芳隆「鍬形石の型式学的研究」『考古学雑誌』79-4 1994
- (24) 中司照世・川西宏幸「滋賀県北谷11号墳の研究」『考古学雑誌』66-2 1980
- (25) 桜井久之「鍬形石の系譜と流通」『考古学雑誌』77-2 1991
- (26) 中村智孝「近江における玉造りをめぐって」『紀要』第9号 (財)滋賀県文化財保護協会
- (27) 山中由紀子「近江の馬具」『河内・大和・近江の渡来人』(財)滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館 1996
- (28) 畑中英二「古墳時代後期から終末期にかけての土墳墓の問題点」『紀要』10号 (財)滋賀県文化財保護協会 1997・山中由紀子「犬上川左岸扇状地における馬具副葬土墳墓について」同書
- (29) 木下尚子「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』81-1

1996

- (30) 森下章司・吉井秀夫「6世紀の冠と沓」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室 1995
- (31) 小林多加士『海のアジア史』藤原書店1997
- (32) 宇都宮清吉『中国古代中世史研究』創文社 1977
- (33) 註6とおなじ
- (33) 細川修平「近江における古墳時代後期の玉造り遺跡」『物と人』滋賀県立安土城考古博物館1997
- (35) 24とおなじ
- (36) 29とおなじ

脱稿後、近江町定納古墳群において、複数の前期の前方後円墳が含まれている可能性を宮崎幹也氏から御教示を得た。「湖北」のイメージをより具体化する重要な指摘であろう。

また、キ鳳鏡について、あと数例の出土を知った。北陸・東海などの東日本からの出土で、畿内を介さない流通がより確実となった。他の鏡式を含めて、再考したい。

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年3月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は2段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。 (K. O)

平成10年3月

紀要第11号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社  
大津市札の辻4-20  
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923

K

滋賀県文化財  
保護協会蔵書印

440